

首巻き春貞外伝 松平藤九郎始末 (一)

小金原御鹿狩の死闘

表紙デザイン junichi Matsuda

主な登場人物

·松平藤九郎

れた。その後夏穂の勧めを受け入れ春江館道場師範として屋敷に留まることに なったがお蘭に惚れられ養子に入り当主となった。 柳生新陰流 の使 い手だが、 体を壊して屋敷の門前で倒れているところを助けら

・ お 蘭

松平春貞と亡き妻幸江の娘理子が産んだ一子。春貞の孫でただ一人の血縁者

・井之上新界

門を叩き向島診療所で働くことになった。 肝煎に。松平春貞亡き後、屋敷を守ってきた 小田原の廻船問屋の次男。 長崎に遊学し阿蘭陀医学を学んだ帰りに小川 またおよしを妻に娶り診療所二代目 **笙船** 0

井之上新一郎

井之上新界とおよしの一子。 長崎へ遊学し吉雄耕牛に蘭学と阿蘭陀医学を学ぶ

米道夏穂

太子堂長兵衛の一人娘で剣の虫。 春貞夫婦の養女となり米道格左衛門と夫婦に

なったが夫亡き後、春江館館長。柳生新陰流の使い手

· 静香

き後、 らえられ奉公することに。亡き公儀隠密弥三郎に女忍びの技を伝授され春貞亡 父の無念を知らしめようと武家屋敷の刀を盗む女賊だったが、 屋敷の奥向き全般の責任者 春貞の屋敷で捕

·堀田秋子

理人富四郎亡き後、 亡き田宮助左衛門の一人娘。 屋敷 の衣服ならびに料理全般の責任者 堀田 万之助と結ばれるが万之助はすでに死去。 料

・田宮(石川)奈美

屋敷で田宮助左衛門の二人目の娘として生きることを決意。 木更津の代官、 石川賢之介の弟仙之助 の娘。 父の敵を討つことが出来、 留吉と所帯を持 春貞 0

お文

雇 義足をつけてい われる。 もともとは 診療所は勿論、 向島診療所の患者で左足を切断する手術を受け、 る。 夫が亡くなった後、 屋敷内の雑用を一手に取り仕切る働き者 縁が あ り娘共々診療所 の手伝 井之上新 いとして 界設計 0

・ お 輝

お文の一人娘で母を助け、 いまでは女医者として働いている

・おたみ

生んだ子が死産だったとかで実家を追い出され途方にくれているとき松之助の

・松之助乳母として雇われた。

屋敷の門前に捨てられていたが、 お文を母として、おたみを乳母として成長し

た

· 堀田道之助

堀田万之助と秋子の一子。 祖父田宮助左衛門の血か、 経済に明るく屋敷の経

理・財務全般を取り仕切る

·吉太郎

留吉と奈美の一子。 長崎留学から戻った後は新一 郎と一緒に診療所を手伝う

·佐吉

亡き弥三郎の甥にあたる将軍直轄の公儀御庭番。 屋敷を陰ながら守る

・徳川家斉

德川幕府十一代征夷大将軍

·松平定信

れる。 幼少期より聡明で知られ、 しかし意次失脚後老中筆頭となり若い将軍家斉の補佐役となった。 いずれは将軍・徳川家治 の後継と目されていたとさ

相模屋清右衛門 (二代目)

日本橋両替商相模屋の主人。

富 吉

・越後屋三井高清

呉服商ならびに両替商。江戸一番の豪商

仏壇仏具の大店太子堂の大番頭だったが先代の主人長兵衛に御店を任された

首巻き春貞外伝
松平藤九郎始末(一
一)小金原御鹿狩の戦い
目次

死闘
生

___•

屋敷 戸向島松平家の当主松平藤九郎はとてもさばけた男だった。 にやってくる棒手振たちにも自ら声をかけることもしばしばだったが、

り、 は己の出目が下級武士 体を壊したりもして世間をよく見知っていたからでもあった。 の息子だったし、 長い間西国を中心に武者修行で歩き回

太一 体でたどり着き、 を頼 体調を壊 ったものの、 し死病かも知れぬと昔の上司であった三島 肝煎りの井之上新界に助けられた。 らちがあかず、 佐川 の勧めで江戸向島診療所に行き倒 の雲助集団 の頭 領 れ 佐 jΠ

その恩義を感じ、 子に入り、 屋敷の当主となってから早くも五年が過ぎてい さらには春貞ただひとりの血縁者である孫の お蘭 に惚れられ

それ

となり、館長 さらにその柳 に就任し名実共に屋敷 生新陰流 の妙技を春江館館長 の顔となったのだった。 の米道夏穂に買わ れ、 これまた後継

藤九郎は春貞を知らなかったが、屋敷の門前に倒れていたとき夢かうつつか…春 貞とおぼしき白髪で長身、その上に首巻きをしている男に手を差し伸べられたと るようになっていた。 いう。それ以来自他共に己は亡くなった初代当主松平春貞に守られていると感じ

時は寛政四年(一七九二)が明け、新緑が眩しく来感じられる五月三十日の夕 「ここのところ御用繁多でいらしたのでお疲れでございましょう」 藤九郎は茶室に井之上新界と静香そして佐吉と共に座していた。

七十歳になっても矍鑠とし優雅な点前を見せる静香が、器を藤九郎の前に置

「おかげでな、体調が良い ので疲れを感じている暇もありませんでしたな」

藤九郎が破顔して答えた。

後でしたか、 しかしこの数年は挨拶回りだけでも大変でしたが、ご当主になられてから半年 上様にもご拝謁なされましたし登城のおりにはご重臣らだけでな

たまたま城内にいらした各藩の藩主どのともご歓談されたよし。 並の神経

はまいってしまいましょう」

新界が言うと、

「これすべて尾張の宗睦さまのお力添えですし、井之上どのの根回しの賜物でご

ざいました」

藤九郎は薄茶を美味そうに喉に落とし、器を置きながら言い切った。

「そうそう、藤九郎さま。あなた様は当主。私の名をお呼びいただくのにどのは

新界が言うと、

不要。呼び捨ててくだされ」

て亡くなった留吉どのはそれがしの命の恩人であるばかりか、それがしが新しい 人生を歩むきっかけと道筋を示してくださった恩師でございますぞ。 「何を言われるか。 剣の師は夏穂さまですが、先生と静香どの、佐吉どの、そし

間違っても呼び捨てにはできませぬ。

先生こそ、お疲れでございましょうや」

と藤九郎は新界に頭を下げた。

「まあ、歳はごまかせませんがご承知の通り藤九郎さまたちのご婚礼の半年後に

息子新一郎とお輝が祝言をあげさせていただきましたので親としては大いに気が

楽になりました」

新界が呟くと、

「あれからすでに四年が過ぎましたか…」

と静香が頷きながら応じ、

「しかし先生。 新一郎どのご夫婦は先生とおよしさまの再来みたいなご夫婦と相

成りましたな」

と感慨深げに言った。

「まさしく。 まあ月並 晩婚なのはとにかく、姉さん女房という点でも確かに似ております みなれど、およしに二人の婚礼を見せたかったです…」

新界が苦笑いにも似た寂しそうな顔をした。そして新一郎がまだ幼児だったころ

からお輝が遊び相手として面倒を見ていたことが昨日のことのように新界の脳裏

に宿った。

わったようだ・・・。

女医者として頭角を現したころから志を同じくする者同士の絆がいつしか愛に変 一郎にとってお輝は一番身近で安心できる女だったのかも知れないし、 お輝 が

満

:が集中し始めているようです」

そんな話しをしながら静香は次ぎに佐吉 の前 に器を置き、

「しかし、当御屋敷はお陰様にて何不自由の無い新玉の年を迎えておりますが、

世情は大変なようでございますな。

そのためか、 あの松平定信さまもここのところ苦慮されておるとか」

と呟いた。

ませんが、正直定信さまはそれどころではないようです」 いたしました。また我が屋敷への攻撃も尾張 「確かに。 定信さまの改革が功を奏したかは分かりませぬが、打ち壊しも沈静化 の殿さまのお陰で今のところござい

佐吉も静香の点前を嬉しそうに味わいながら言った。

と藤九郎が佐吉に問うた。 「ああ、やはり尊号一件が仇をなしていますかな」

濁 強めることにはなりましたが、最近の落首に『白河の清きに魚もすみかね 「は りの田沼恋しき』とありますように、そのあまりに厳しい緊縮政治に庶民の不 61 確かに定信さま主導の寛政の改革と呼ばれている緊縮財政 は幕府 て元の の力を

- 13 / 201 -

佐吉は続けて、

上絶版となり、林どのは蟄居となりました。 「また今月にはご承知のように林子平どのが書かれた 『海国兵談』 が版木没収 0

りましたが、 蘭学者の先生方も田沼さまの治世と違い 定信さまの足を引っ張る一番の出来事はご指摘の尊号一件になりそ お (1 それと思うような出版 が できなくな

うですな」

と言い切った。

が定信が後に廃される直接のきっかけとも言われたこの紛議を知っておきたい。 ちなみに尊号一件とは朝廷と幕府との紛議事件のことである。 いささか長くなる

当時の天皇は一一九代光格天皇であった。

光格天皇は典仁親王の子であったが、後桃園天皇が崩御したときに皇子が 号を贈ろうと考えたのだった。 った。 けには 7 ったためその養子となって即位したことにより、 いるのが徳川家康が定めた祖法、 これを憂い変えたいと考える光格天皇だったが、その決まり事を取 かない。 そこで光格天皇は実父典仁親王に対して太上天皇(上皇)の尊 すなわち禁中並公家諸法度であり改正する 実父よりも位が上になってしま り決め 7 な か

それ を得て尊号宣下の強行を決定するに至ったものの、 徳川時代以前の古例を持ち出して定信と対抗し、朝幕間の学問的論争に発展する いない 昨年の寛政三年十二月に天皇は参議以上四十名の公卿のうち三十五名の賛意 までにも朝廷と老中定信の間にはいくつか 人間に皇号を贈るのは先例のない事態として反対した。 の摩擦もあ 結局は断念せざるを得なかっ り、 定信 しかし朝廷では は皇位 につ

また、タイミングが悪い事に将軍徳川家斉も実父の一橋治済に対して「大御所」 しかしこれにより家斉の不興を買うことになったという。 を拒否している手前もあり、将軍に対しても同様に反対せざるをえなくなった。 の尊号を贈ろうと考えていたが、将軍後見役でもあった定信は朝廷に対して尊号

「しかし定信さまは人というものの心情を理解されていないようにも思えます

井之上新界が話柄を替えた。

すが私にはそれだけではないように思えるのです」 「いや、上様と溝ができはじめたの は その尊号一件と世間で言われているようで

「ほう…」と新界が呟いた。

補佐役となりました」 「定信さまは上様が将軍になられた際にまだ十五歳ということで老中と共に将軍

「確かに」

「それから五年、上様は今年で二十歳になられましたな。

七八一)でしたかな、家治さまのご養子となり、 ある家基さまが急死されたおり他に男子がおられなかったことから天明元年(一 さまのご長男としてお生まれになりました。その後第十代将軍家治さまの世嗣で その上様…家斉さまはご承知の通り、御三卿の一つである一橋家の当主一橋治済 江戸城西の丸に入られました」

「その一橋治済さまはあの八代将軍吉宗さまの孫。したがいまして上様もご聡明

新界が話しを進めると、

なお方であられましょう」

「然様でございましょう」

と納得げの静香が、

「ということは、 上様ならずとも二十歳ともなれば子供ではなく征夷大将軍とし

ての自負も自覚も生まれて当然でございましょう。

静香の言葉で一同が頷いたとき、お蘭が血相変えて飛び込んできた。 補佐役など不要とお考えになられてもよきお歳でございますね」

「いかがした。お蘭」

「大変でございます。上様のお成りにございます」

いつもは冷静なお蘭が慌てていた。

「はい」「上様とは家斉さまのことか」

「確かに、それは大変。

それがしがお迎えに出るが、秋子どのに願って膳の支度を頼んでくれ」

藤九郎はそう言い置いて、茶室の躙り口から滑り出た。

しばしの後、 藤九郎は客間において十一代将軍徳川家斉と相対していた。

「久しいのう藤九郎。

当主になって以来になるな」

輝くような若さの家斉に藤九郎は 「御意」と平伏した。

頻繁に訪れたと嬉しそうな顔で話してくれたものぞ。

「前将軍の父(徳川家治)がこの屋敷の話しをするとき、余も尊敬する吉宗爺も

でな、一度余も訪れたい思っておったが、ここのところいろいろと繁多での

う:。

急で済まぬがやっと足を向けられたわ」

「しかし、ここは変な屋敷よのう…」

家斉は出された茶を躊躇なく口にしながら機嫌良く饒舌だった。

家斉の呟きに、

「恐れながら、何故でございましょうか」

と藤九郎は笑顔で問うた。

「うむ。まずお主たちは旗本でも御家人でもないという。

聞けば幕府からの禄を食んでいないというではないか」

「御意」

「であるにも関わらず、 何度も幕府の…というか父や祖父たちの危機を救ってき

家斉は真顔で呟いた。たという…」

藤九郎は、

得田新之助さまと名乗るお方に力を貸されたのがご縁で有徳院さまと知り合った 「すでにご承知でございましょうが、先々代当主松平春貞が町屋で襲われていた

と聞かされております。

その後春貞の人物と剣の腕を見込んでいただいたのでしょう、婚礼の席で生殺与 奪の命を申し つけられたとか…。 その際に授けられた刀は恐れながらいまそれが

それに・・・」

しの愛刀となっております。

う
さ
」

万一いざ鎌倉となれば幕府というより上様をお守りする幕臣の端くれと承知して おりますし、これこそ松平春貞の遺言でもございます」 「我らは確かに旗本でも御家人でもないいわば浪人者の身分ではございますが、

藤九郎が言い切ると、

「よう言うてくれた」

家斉は笑顔で手を叩いていた。

なお有徳院とは八代将軍吉宗の法号である。

座り直した家斉は、

な日々を送れるものと考えておったが、いわば毎日がいざ鎌倉よ。 「正直申すと余は、将軍というものはもっと…そうだな、楽とは言わんが穏やか

頭が痛いことばかりでな…。

それに征夷大将軍とて思い通りにできぬあれこれも多くてな」

と苦笑いした。

「下々の我らには想像も出来ないことばかりでございましょうな」

藤九郎が同情の意を表すと、

「何しろ城中は人が多くていかぬ。その上に一癖も二癖もある者ばかりぞ。

にいそぎんちゃくのようなうるさ方がおるでな、余とて気が疲れるわ」

と家斉は苦笑した。

「うるさ方でございますか」

思わず藤九郎が問うと家斉は頷きながら、

「そういえば、お主たちは『老中筆頭は一緒ではないのか』 と聞かんな」

一瞬間を置いて藤九郎は、

悪戯っぽい表情の家斉は逆に問い返した。

「ご無礼ながらそうしたことをいちいち上様に申し上げるお方がおるのでござい

ますか」

と聞くと家斉は頷きながら、

「お主らはあのいそぎんちゃくを敵視しておると聞くから申すが、余もすでに一

十歳になった。

特別に将軍補佐など必要ないと思っておる。老中たちもおるからな」

と吐き捨てるように言った。

「御意。ただし上様、それがしたちがあのお方に敵意を持っておるのではござい

ませぬ。 あのお方が我らに敵意をお持ちなのでございます。

事実当屋敷もその手の者に襲われました」

平伏しながら藤九郎が言うと、

実はな、今日も向島の屋敷に行くが同道するかと聞いたのじゃ…」 「分かっておる。あやつは己がすべて正義だと考えるところが厄介な奴よなあ。

「お断りになられましたか」

「うむ。急用があるとかでな」

そう言い置いて家斉は笑ったがすぐに真顔になり、

ても向島の屋敷には指一本触れてはならぬ。あの屋敷は徳川の守り神じゃから 「ただし安心せえ。これは父浚明院(家治)のご遺言でもあるが 『将軍が代わ つ

な』とよく言われておった。

これまで多々あったようだが余の目が黒いうちはあやつはもとより、 誰にしても

指一本触れさせぬよう努力する…」

と明言した。

「有り難き幸せ」

藤九郎が平伏したそのとき、

「失礼いたします。膳の用意ができましてございます」

襖の向こうから静香と秋子の声がした。

配膳の場には藤九郎だけでなく妻のお蘭、 診療所の肝煎りである井之上新界、そ

して静香が同席していた。

「下々の食す膳でございますが、お口に合いますかどうか…」

静香が上等の下り酒の酌をしながら勧めた。

「うむ。これは美味じゃな。

魚のようであるが、どのような食べ物じゃ」

家斉は箸を置いて問うた。

料理をした秋子が平伏しながら答えた。

「はい。 『鮪のきらずまぶし』と申すそうでございますが、中は鮪の赤身でござ!***

います」

「ほう、鮪とな…」

「はい。 これをほどよい厚さに切り、塩をあて、割酢に浸してすぐに水分を拭い

ます。

まぶしてございますのは裏ごしした雪花菜でございます。

雪花菜は酒と塩を微量加えてとろ火で煎ってございます」

ちなみに雪花菜とは卯の花、おからの雅称だ。

「散らしてございますのは木耳を千切りにしたものと銀杏切りにいたしました山

葵でございます」

「鮪は下等な魚だと城では出て来ぬが、なかなかに旨いものよのう」

家斉は何度も箸をつけた。

鮪は古名をシビというが、現在でも関西ではシビ、ハツなどというところもある

そうな…。

また鮪の他に小鰭や鰺も用いられる。

半時ほどの時が過ぎ、お付きの者に促された家斉は名残惜しそうに腰を上げた。

新界が、

「恐れながら、政務ご繁多と存じまするが、くれぐれもご自愛くださりますよ

う

と声をかけると、

「馳走になった。

なに、頭 づくそう思ったわ。 かしては結局民の不幸に繋がるような気がしてな…。 の痛いことばかりじゃが、将軍が上だ下だ、 寛政の改革を見ていてつく 右だ左よとその都度心

将軍は女子でも抱いて日々過ごすのが一番の務めだと実感しておる」 家斉はにやりと笑いながら屋敷の門を出て、思い出したように振り返った。 「そうそう、忘れるところだったが、今日佐吉はどうした」

「はい。念のためだと上様の陰護衛を勤めております」

藤九郎が答えると、

ぎたでこの時より御庭番の任を解く。

「長きにわたりそちらの一員として勤めてきた佐吉だがな、さすがに歳を取り過

そしてな、本人の意志でもあるそうだが、できればこのままそちたちの一員とし て屋敷で奉公させ労ってくれ。

頼んだぞ」

その佐吉は母屋の屋根の上から辺りを監視していたが、家斉の言を聞きその場で そう言い置いて家斉は三つ葉葵が光る黒塗りの乗物にその身を滑らせた。

感激し平伏していた。

将軍一行を見送り母屋に踵を返したとき、 お蘭が「うつ」と口を押さえてしゃが

み込んだ。

「お蘭さま、いかがされました」

慌てて静香が抱き起こそうとしてふと新界と目が合うと新界は和やかに頷いてい

るではないか。

「先生、もしや…」

静香の問いに新界は、 お目出度うございます」 「藤九郎さま。どうやらお蘭さまはご懐妊のようでございますな。

と言い切った。

「何と」

お蘭を抱きしめた藤九郎は

「うおおおおっ」

と歓喜の声を上げ、屋敷中は大騒ぎとなった。

居間に戻った藤九郎は新界に頭を下げつつ、

「先生。この歳になって子に恵まれるとは思ってもみなかったがどうか、 母子共

に元気であるよう宜しくお願い申します」

と願った。

合間にお蘭の体調を診る役目を仰せつかったのだった。 この日よりお **蘭は道場での稽古を禁止され、女医者のお輝が診療所** の仕事 の合間

分からない悪阻の段階で皆の期待は大きかった。 た。何しろ男子であれば松平藤九郎の後継者となる訳だから男の子か女の子か つもより遅くなった夕餉だったが、膳を囲んでいる全員が輝 77 た顔 をし

「藤九郎さま。この目出度い出来事をお知らせすべき方々はいらっしゃらない 0

ですか」

お輝がそう問うたが、

藤九郎がいつもより酒を飲んだか、些か赤い顔で応じるとお文が、 「うむ。 俺にも、そしてお蘭にも血縁者はおらぬ故 な

「ま、 お殿さまの舅さま方はやはり井之上先生と静香さまということでございま

すかな」

と遠慮の無い物言いをした。

「おや、それは嬉しゅうございますが、 私は姑ほど五月蠅い婆でございますか

普段は軽口をあまり叩かない静香も目出度い席で嬉しいのかそんな軽口を叩

お文は肩をそびやかし、ぺろっと舌を出した。

笑いながら藤九郎は新界に、

「お蘭が母子共に元気でいられる秘訣があれば先生、なんなりとお教えくださ

と頭を下げた。

「藤九郎さま。ご安心なされませ。

当御屋敷には秋子さん、奈美さん、お文さんらお子を生んだ経験ある方々がおら れます。 また私も含めて医者がついておりまので必ずや元気なお子が生まれてく

るものと思います」

新界も嬉しそうに答えた。

それに診療所 几 診療所に詰める必要はなかった。 たちから慕われるまでになってい 井之上新界は になっていた 帳面な新界 しお文の娘、 もいまでは息子の新一郎と留吉・奈美の一子吉太郎が立派な蘭方医 は己の健康 七十六歳 に についても留意していたから歳の割に なってい お輝は 新 たから新界は若い頃のように毎日朝から晩ま 郎の妻として、 医者 の不養生とは良く言 女医者として地域の われ は元気だった。 る言葉だが、 ン女子供

秋 いの木漏り れ日 が柔らかな十月末日の夕刻、 新界の姿は再び佐吉、 静香と共に茶室

にあった。

茶釜に身を向けながら静香は、春江館からは藤九郎らの気合いが聞こえていた…。

「先生。お蘭さまの体調はよろしいようですね」

と問うた。

「はい。剣術のおかげか、お体は丈夫のご様子。安堵しております」

新界が応じると、

「そういえば、佐吉さま。公儀御庭番の任を解かれ、 いかがでございますか、 お

体に変調はございませぬか」

静香が佐吉の体調を気遣った。

たことがありましたが、あっしもあっと言う間に同じような歳になってしまいま 「お気遣いありがとうございます。昔、 弥三郎爺が体が動かず困るとこぼしてい

しかしお陰様でまだ屋根に飛び上がるくらいのことは出来ますでな」

と佐吉が笑った。

「確かに我らは大いに歳を取ってしまいましたが、 なんといいますか…春貞さま

らのお陰でよき人生を過ごすことが出来ました。

新界がしみじみと呟いた。いまの若い者たちの行く末の方が心配ですな」

- 30 / 201 -

「そういえば先生。 来月二日の祝賀会にはご出席なさるのですね」

静香が問うと佐吉が、

「何の祝賀会ですかな」

と聞いた。

しも呼んでいただきましたのでな、楽しみにしておるのです」 「はい。友人の杉田玄白どのが六十歳、 前田良沢どの七十歳の合同祝賀会にわた

井之上新界が答えるとこれまでの事情を知る静香は、

「それはようございますな。

しかし良沢先生はお顔をお見せになるのでしょうか」

と心配顔をした。

またこの年の二月、 前野良沢は「解体新書」が出版されてから公の席には顔を見せずにいたからだ。 妻柏木氏を亡くしたこともあり、 関係者は良沢の健康をも心

配していた。

多々集まっていた。

十一月二日、予定通り杉田玄白と前野良沢の合同賀宴が催された。 長寿を祝う集まりであり、二人の弟子たちはもとより江戸で名のある蘭方医が これ は 両 師 0

ったが、杉田玄白と機嫌良く手を取り合ったと側に居た井之上新界が屋敷に戻 たも のの前野 良沢 は久しぶ りに真っ白になった髷と痩せ細 った姿では

り、上機嫌で皆に語っていたのが印象的だった。

実は新界自身は公言しなかったが、新界は一同の中で最長老であったがために、

杉田玄白と前野良沢の隣に座らされたらしい。

年が変わり寛政五年(一七九三)三月、 お蘭は無事に男子を産んだ。そして幸

にも母子共に健在であった。

そして子供の名は春幸と決められたが、 春貞、婆様の幸江の名から一字ずつ採用された・・・。 お蘭の意志が強く働いたと見えて爺様の

屋敷はお祭りのような騒ぎとなったし、 出入りの商人たちはもとより友人知人た

ちが次々と祝いに駆けつけた。

お蘭は床上げ前だったし乳児はまだ宴席に連れてきては駄目だという新界の注意 後で少しだけお披露目することになっていた。

そのお蘭には春幸を取り上げたお輝とお文が、そしておたみが常につきっきりで

.話をしてい たし、 万一のことがあってはと佐吉が屋敷 の隅で陰護衛してい

「藤九郎さま。跡取りのご誕生、まことにおめでとうございます。また母子共に

お元気の由、安堵いたしました」

越後屋の三井高清がまず祝いの声を上げた。

「ご一同、礼を申します。

間に夢が覚めてしまうのでは この年で子を授かるとは思いもしなかったが、なにか夢のようでな、あっと言う ない かと怖い気持ちが半分じゃ」

藤九郎は機嫌良く一人一人の客に挨拶していた。

「お子の名は藤九郎さまが決められたのですかな」

商人たちの問いに、

「名付けたのはお蘭だがな、良い名だと思っておる」

藤九郎が答えると、

「おや、 失礼ながら早くも奥方さま の尻 に 敷 か れておられますかな」

などと遠慮の無い言葉が飛び交ったが藤九郎は、

「いや、始めから夫婦の力関係はそれがしの負けだ。

養子に入ったときからの運命よなあ」

と声を上げて笑った。

ふと相模屋清右衛門が真顔で、

「そういえば、このお目出度いお席にそぐわないお話しですが、ここのところ松

平定信さまの人気が急に落ちておりますな。

なにしろ近年は現実から眼を背けているともっぱらの悪評でございます」

と渋い顔をすると商人たちが頷いた。

親しい商人たちも屋敷と定信の確執は承知していたからだ。

のように定信さまは蘭学は役に立たないとまで明言されておりますからな」 「いや、我ら蘭学者たちも表だって目新しいことができません。なにしろご承知

井之上新界も同調した。

から蘭方の医学は役立たずだ』とまで申されたようですぞ」 「なにしろ、これだけ蘭学が支持されてきた世に『日本人と西洋人の身体は違う

と新界の友人たちからも苦言が出た。

例えば田沼意次がロシア船の来港が目立つようになった際、蝦夷地を開拓して対 抗しようとしたが、定信は未開地のままのほうが安心だとよく分からない理由を 事実松平定信はこの頃になるとひたすら現実から眼を背け無策を続けていた。

申し立てて放置した。

ちの教育水準の低さをさらけ出すことになり不名誉だなどとして対馬で追 ある朝鮮通信 であり変更の余地はないと頑ななだけで何の手も打とうとしなかったし、 無論ロシア船だけではなく英国船や仏蘭西船も現れ始めたが、 一使との懇談も知識人といわれる者達が競って教えを請うのは自分た 定信は鎖国は祖 歴史の い返 法

「まあまあ、ここでなら言いたいことを話せますが、 貫性がございません」 定信さまは堅物過ぎますし

「一貫性がありませぬか」商人たちは日頃の不満を言い合い始めた。

新界が問うと、

に上皇(太上天皇)の称号をお与えになろうとした際、なぜ反対なさいますか 十余州は朝廷からの預か 「はい。定信さまは勤王のお志は篤く、噂によれば畏れ多くも公方さまにも なりません』とまで諭されたようでございますが、それなら天皇さまのお父君 り物であり、 ゆ めゆめご自分のものであるなどと考えて

「それとこれとは別ということでしょうか」

扱いなさりたいという公方さまのご意志とぶつからないで済むというものですか 「そうですよ。お許しになっておれば公方さまのお父君を西の丸に迎えて大御 旂

などと話しは盛り上がったが、藤九郎は昨年屋敷にやってきた家斉が「すでに二 十歳の余に後見役など不要」と口走っていた顔が浮かんだ。 「こんな調子では近々ご老中筆頭とはいえ、追われるのではございますまい

は 育ったことを承知していたし、朝の早い時間帯には静香に読み書きを教わり、昼 自分が屋敷の門前に捨てられ、屋敷で拾われてお文を母親、乳母をおたみとして ところで十三歳になっていた松之助は素直な男子に育ってい 一時ほど春江館で新陰流の手ほどきを受けていた。さらにお文やおたみを手伝

い、水くみから畑仕事までを黙々とこなしていた。

暮らせるようになったが、その日の昼餉が終わった後に藤九郎はお文とおたみを 春幸が誕生してから十二日ほど経った日、 お蘭はやっと床上げとなり家族三人で

釜はすでに湯が沸いており、いつものように静香が薄茶を点てる準備をしてい

茶室に呼んだ。

ここはあたしらが座る場所ではありませんがな」「と、殿さまあ。いったい何ごとでございますか。

お文は心配そうに藤九郎に声をかけた。

破顔しながらも藤九郎は、

「知っての通り、我が屋敷は皆家族じゃ。 お文さんらが茶室に入れないなどとい

う決めごとなどあるはずもない。

というと静香がお文とおたみの前に茶器を置き、ただな、いままでその機会がなかっただけよ」

「どうぞ、お作法など気にせず口にしてくだされ」

と声をかけた。

緊張しながらもお文は、

「た、たしかさ…器の表を向こう側に回してさ、三口で飲み干すんだったよおた

みさん」

などと呟きながらも薄茶を喉に落とし、

「ご馳走様でした」

と両手を畳みにつけて頭を下げた。

一方おたみは、お文の動作を逐一真似るのに懸命だった。

「さて、ここに呼んだのは松之助のことだ…」

藤九郎が口火を切るとお文が、

「あれっ、松之助がなにかやらかしましたか」

と腰を浮かした。

「これこれ、落ち着きなされ。そういった話しでは無い。

実はな…」

藤九郎も静香の煎れた薄茶を楽しみながら話し始めた。 「えつ、松之助を若様の養育係にですと」

ってぶとこととと呼いた。

お文がまたまた腰を浮かす。

「春幸は生まれたばかり、 親馬鹿と笑われようが奴は立場上この屋敷 の将来を担

「はい」

っていくことになる」

んだのじゃが、春幸へ剣はそれがしも含めて修練させるつもりじゃ。しかし一番 「でな、こうしたことは早めにはっきりさせておいた方が得策だと考え二人を呼

難しいのが人間形成じゃ」

「にんげん…けいせい…ですか」

「うむ。春幸にこの屋敷の歴史を背負い、人を思いやって将来を切り開いてい

力がなければ我が屋敷は春幸の代で滅びる…」

「そうさせないためには春幸を真に一人前の当主の器に育てなければならぬ。 「そ、そんなあ」

うではないかな」 「まあ…」

古い教えにも大切で重要なことも多々あるが、 い合える柔軟な人間になって欲しいのだ」 「そのためには日々の教えと勉学が大事だが、 我らは皆年寄り…。 それを踏まえて新しい時代に向か

なんだか段々難しいお話しになってきますね。 殿さまあ」

お文が少し首を傾げると静香がクスッと笑った。

藤九郎は、松之助が素直で実直な男子に育っていることを指摘し、 くようになったら松之助を養育係として命じたいのだと説明した。 春幸が物心

「両親だけではどうしても可愛いだけで偏った接し方になる。まっすぐに育っ

た、そしてまた己の過酷な運命を受け入れてお文さん、おたみさんに育ててもら った恩もすべて飲み込んでいる松之助に春幸を託したい のじゃ。

でな、将来は春幸の右腕になって欲しいと願っておる」

藤九郎が言うと、

「勿体ない、殿さまあ。

しかし松之助は御屋敷の子。 あたしたちに断られる必要などありませんよ。

殿さまは殿さまですから…」

とお文は涙目で答えた。

「いや、心得違いするでない。

松之助の母親は間 「違いなくお文さんであり、 おたみさんじゃ。それは松之助もよ

く承知しておるに違いない。

我らは距離を持って松之助に接しては来たが、 乳のみ子の松之助をここまで立派

に育てたのは二人の功績よ。のう静香どの…」

藤九郎が静香に同意を求めると、

「はい。 それに、ご承知のように毎日私の部屋で読み書きや五経などを勉強して

おりますが、実に聡明なお子でございます。

なによりも、己の立場をきちんと弁え、目立つ言動をせず日々誠実に過ごしてい

ることに感銘を受けております」

静香が和やかに言うと、涙声のお文は、

「あっ、もしかしたら静香さまが今回のことを推してくださいましたか。

ありがたいことです。このとおりです」

お文とおたみは静香に頭を下げた。

「それがしから松之助に命じるのはまだ先のことになるが、今日の意を含んで今

後も松之助のことよろしくな」

藤九郎がやさしく言葉を掛けた。

その年の七月二十五日、 忍び仲間からの情報だとして佐吉が驚愕の話しを持って

きた。

どうやら二日前の二十三日、 老中首座で将軍補佐でもあった松平定信が辞職を命

ぜられたという。

「やはり尊号一件が原因のようですな」

佐吉がそう報告すると井之上新界は、

「これで我ら蘭学者たちもまた動きやすくなりますかな」

と微笑んだが藤九郎は立場上、

「これで政策が落ち着くとよいが、 上様や幕閣は相変わらず頭の痛いことだろう

7

と思いやった。

軍家斉は定信の下で幕政に携わってきた松平信明を老中首座に任命し、これを戸 ただし松平定信の失脚はただちに幕政が根本から転換したわけではなかった。 田氏教、 ていくことになる。このため彼らは寛政の遺老と呼ば 本多忠籌ら定信が登用した老中たちが支える形で定信 れた。 の政策を基本継続

信明はまた松平定信が禁止した賄賂を公然と認め、 インフレが発生した。 貨幣を改鋳し、乱発したため

く、化政文化が花開いていく。とはいえ、松平定信失脚後の治世はインフレ問題を除けば庶民への圧迫は少な

られ活気のあ 松平藤九 郎 の屋敷 る日々を過ごしていた。 は当主夫婦 の存在 は しかし問題がないわけではなかった。 もとよりだが、 春幸という新たな命を授け

それは人手不足、特に男手が少ないことだった。

春貞 て田宮助左衛 の時代に 門がいたし、なによりも器用で働き者の留吉がいた。 は剣客たちとはいえ、米道格左衛門、 堀田 万之助、 横手富三郎そし

は 無論庭掃除や畑仕 無位 無冠と は 7 え何とい !事は近隣の百姓たちに願えば喜んで働きにきてくれたが、ここ っても武家屋敷 である。

松平定信 らってのことか、 が知られるにつれ大名諸侯からの剣術の出稽古依頼も増えてきた。 の失脚以来、 押し込み強盗 屋敷への攻撃はなかったものの診療所奥にある二棟の蔵 のような事件はままあったし、当主藤九郎の存 を

道場に顔を出すことはあっても他藩屋敷への出稽古は止めていたから人材が いのだ。 かしそれに値する剣者は藤九郎は当然としても米道夏穂はさすがに高 齢 0 ため

欲しかった。 齢で無理はできなかった。また反対に松之助はまだ少年だったからやはり男手が そして剣術以前に広い屋敷保全などをやろうにも留吉は いないし佐吉にしても高

夜の膳が終わった後に事務方の道之助が呟いた。 「とはいっても藤九郎さま。 まさか一般募集するわけにもまいりませんな」

兀服なさるに至っても家臣がいないくては面目がたちませぬ」 「そうですね。それに当主さまご夫婦に跡取りもできました。 しかし春幸さまが

夏穂が茶を飲みながら声を上げた。

温 「確かに。当家も春貞さまの時代とは違いますから平城としてもそれなりに力を 一存しておかねばなりませぬ

なにしろあっしもそうですが年寄りばかりでは…」

と佐吉が笑う。

藤九郎が思い出したように、

張江戸藩邸から若い者を数人支援のためとして借り受けたことがあったようです 「そういえば夏穂さま。『松平春貞一代記』に書かれておりましたが、かつて尾

と問うた。

それにちょうど幸江さまのご出産の予定もあり、お子たちを守るためとの理由で ると見せかけ当屋敷におびき寄せ、我らで殲滅したことがきっかけでした。 「はい。あれは享保十二年でしたか、上様がお鷹狩りのあとで襲われた際に逃げ

夏穂が言うと静香が、

ございました」

「夏穂さま、それはそれでお力になりましたので…」

と問うた。

夏穂は茶器を置き、少し思い出すように思案しつつ、

数人ではかえって怪我人が出るのではと。 「相手が悪うございました。襲ってくるのが忍びであろうと分かったとき、若者

正月だったこともあり、 お二人だけ残し後はご実家なりに帰しましたが、 理子さ

ま…お蘭さまの母君ですが…ご出産の混乱を狙 い襲われました」

「ほう」

「それでいかがされましたか」

いい方が難しいものの…一時の助っ人というのでは真に屋敷を守るという覚悟に 「何とか無事に切り抜けましたが、 若者の腕が未熟というだけではなくやは

欠けるのではないかと思いましたな」

夏穂はそのときを懐かしむように遠くを見つめる表情で言い切った。

「なるほど。助っ人ではだめですかな」

新界が呟き続けて、

「では藤九郎さま。いっそのこと将来を見据え、ご家臣を数人新たにお召し抱え

になってはいかがでしょうか」

と言うと一同が頷いた。

「殿さまあ。それはよいですだ。 御屋敷らしくなりますですよ」

お文が思わず口にすると、

「そうか、屋敷らしくなるか」

と藤九郎が苦笑いし、

でも良いわけではない。ひとつ間違えれば我らの寝首を掻かれる恐れもあるから ゕ し先ほど道之助が申したとおり、 屋敷に留め置き一緒に暮らすとなれ

身元が確かで力になってくれる者達をどう集めたらよい かが問題じゃな」

というと、

「確かに。まさか家臣募集の貼り紙を貼り巡るわけにはいきませんね」

奈美が可笑しそうに口にした。

「とはいえ、一時の助っ人ならともかく召し抱えるとなれば先の例ではな 77 · が尾

張藩などに頼めば済むということではあるまい。さて…」

藤九郎が、腕組みし首を傾げると秋子が茶器を両手に包み込みなが

らか の都合でお役につけず悶悶とされているお方も多いはずです。

「藤九郎さま。亡くなった父もそうでしたがご承知のように力のあるお方でも何

直接 の貼 り紙 が無謀なら、 お出入りの商人方やお顔見知りの方々にご相談されて

はいかがでしょうか」

と静かに言い切った。

「うむ、それが取り急ぎ現実的な策かも知れぬな

後屋や太子堂、相模屋の主人たちに相談してみてくれぬか。 静香どの、あまり話しが拡がっては収拾がつかなくなるやも知れぬで、 まずは越

よき人材をご存じないか…とな」

「畏まりました」

浪人の父親と暮らしていた若い頃から裁縫に秀でていたこともあり、ときに越後 ということで、翌る日に早速静香は秋子を伴って日本橋へと足を向けた。 屋から仕事を受けていたので交流があったからだ。 秋子は

破顔しつつ出てきた越後屋の三井高清は、

「どうやら本日はお召し物のお話しではございませぬようですな」

そう言いながら二人の袖を引くように奥座敷へと誘った。

静香は主人藤九郎の使いだと断りつつ、一連の危惧と共に数人の武家を召し抱え

ようかという話しを高清に話した。

「お武家さまの御屋敷のあれこれについては存じ上げませんが、僭越ながらよき

ご思案だと思いますな」

高清は何度も頷きながら賛意を示した。

「問題はどう人材を集め選別されるかでございますな」

多くの使用人を使っている高清だけに静香らの危惧は理解していた。

だと存じます。 「はい。私などが申すのも生意気でございますが、人を使うのは大変難しいこと

幸いこれまで春貞の屋敷は内輪もめとか紛争はまったくございませんでしたが、 どの御屋敷、どの藩を拝見しても人が集まるところ問題が生じるのが常のようで ございますからね

静香が言うと頷きながら高清は、

「然様でございます。ご承知のように我が越後屋も跡目の問題で多くの時間と

金、そして人の心を消耗いたしましたからな。

ともあれ使用人ならともかく、お話しのような仕儀ではまさか口入れ屋に口利き いうことでございますな」 してもらう訳にもいきますまい。問題はできるだけ腕が立ち、信頼できる人物と

と考えながら、

ま…あなた様のお父上は先々代の時でございましたか、手前どもの家作にお住み 「そういえば以前頂戴した『松平春貞一代記』に書いてございましたが、秋子さ

の時に春貞さまとお知り合いとなり、 御屋敷にお仕えになったと知ったば

ございます。

まずはお仲間たちにもお話しを通して何かお知り合いのお侍さまがおいでになる なにか…ご縁を感じますが、そんなよいご縁がまたございますと宜しいですな。

かお聞きしてみましょう。

また手前にも些か心当たりもございます。しばしお時間をくださいまし」

と相好を崩した。

越後屋を後にした二人が日本橋のたもと辺りまで来たとき橋のたもとで野菜を売

っていた老婆を邪魔だと蹴り倒した男らに遭遇した。

静香が飛び出したとき、近くにいた浪人らしき男が無頼の者達四人の前に立ちは

だかった。

「年寄りに何をする。馬鹿者めが」

三十路前後の侍だったが、月代は伸びていたものの髭は綺麗に剃っていた。 「なにをつ。 往来で駕籠など並べおってふてえババアだ。邪魔立てするとさんぴ

ん、お前も痛い目を見るぜ」

なおも倒れた婆を蹴ろうとしたとき浪人がすっと間合いを詰めたと思ったら

無頼漢は空を一回転し地べたに叩きつけられていた。

その隙を見て静香は老婆を抱き起こし、かばうように構えていた。

「このやろう、 痛めつけろ」

と三人が抜刀し浪人に迫ったが浪人は刀を抜くこともなく太刀筋を躱しあっと言

う間に三人を一間半ほどすっ飛ばした。

一人は腕を折られたらしく悲鳴を上げながら逃げ出した。

継ぎの当たった着流しの裾を直しながら浪人は

「怪我はございませんかな」

と婆を抱いていた静香に問うた。

「おかげさまで大丈夫のようでございます」

後ろ姿を不思議なものでも見るように浪人はしばし眺め「ふうっ」と長い息を吐

静香は老婆に笑顔を送り、秋子を促しつつ日本橋を渡っていったが、

その二人の

訳ござらぬ」

たというのだ。 た。無論他でもない、先日静香らが依頼した話として具体的な推薦者を連れて来 それから七日が過ぎた昼過ぎ、越後屋三井高清が一人の浪人を連れてやってき

「これは越後屋さま、早速恐れ入ります。どうぞこちらへ」

とちょうど庭にいた奈美が二人を客間に案内した。

しばしの後、藤九郎と共に茶を運んできた静香が部屋に入ってきた。 「これは高清さん。大店の店主さまに使い走りのようなことをしていただき申し

藤九郎は磊落に声をかけて座すと高清と連れの武士は平伏しつつ、高清が、 をお連れ申し上げた次第。 「過日静香さまらからお話しの件でございますが、生意気ながら手前が推すお方

といつになく緊張した面持ちで挨拶した。ご面談だけでもお許し願えればと存じます」

「お顔を上げて下され。越後屋さんと我らの中ではござらぬか」

「ははつ」

そのとき、高清と共に顔を上げた浪人が「あっ」と小さな声を上げた。

静香も、

「あなた様は…」

と驚いた様子だった。

その男は過日静香と秋子が越後屋の帰りに出会った、 無頼の徒を懲らしめたあ O

男だったのだ。

今日は月代も綺麗に剃っていたが粗末な姿はそのままだった。

静香と浪人の反応が意外だという顔をしながらも高清は

「こちらが御屋敷のご当主、松平藤九郎さまと奥向きをお務めの静香さまでござ

います。

藤九郎さま、こちらは久世仙之助さまと申され、手前どもの家作にお住みのお方

でございます」

久世仙之助と紹介された男は藤九郎の前に平伏し、と紹介した。

「それがし、久世仙之助でござる。

関藩でさるお役に着いておりましたが五年ほど前に一揆の責任をとらされまし

て浪人の身となりました」

と名乗った。

すかさず静香が藤九郎に、過日越後屋の帰りに出会ったあのお方でしたと手短に

「ようお越しになりました。松平藤九郎でござる。

話すと高清は知らない話だったようでぽかんとしていた。

関藩とは仙台藩の支藩でござったな」

「さようでございます」

息入れた藤九郎は、

「今日ご足労いただいたことの意味は越後屋さんからお聞きでございますかな」

と問うた。

御屋敷がどのようなお役目を持った御屋敷なのかが何度高清さんからお聞きして 「はい。浪々の身故、 仕官のお話しだと承っておりますが、正直申してこちらの

と頭を掻いた。

も分かりませぬ」

静香が思わず笑い声を立てたので座が馴染んだ。

ここはどこの藩にも縁がないいわば浪人集団なのだと説明した。 九郎 は、確かに数人の家臣となる人材を探していることを告げ、 とは

れる場所とのこと。さすれば怪しい場所ではないと存ずるが、ますます混乱する 屋敷。さらにお聞きしたところによれば畏れ多くも上様や尾張藩主様までが来ら 「いや、大変ご無礼ながら天下の越後屋さんの店主どのが嬉々としてこられ かりでござる」

藤九郎は久世仙之助の身を詮索する前にできるだけ分かりやすく屋敷の概要を伝 えようと話を始め 久世仙之助と名乗った男は人なつっこい顔をほころばせながら再び頭を掻 た。

す。またこれまでは大藩への出稽古は勿論、門弟からの月謝収入、それに甘藷と 弟でしたが事情があり乳母とこの江戸でお暮らしになったのです。 高麗人参の栽培でなかなかの実入りがございます。 なくお過ごしになられましたし現に我らもそのお陰で生計が成り立ってお また詳しくは 「初代当主でありました松平春貞は尾張藩主継友さま、 申せませ ぬが、実父尾張藩三代藩主徳川 綱 宗春さまと腹違い 一誠さまのご配慮で不自由 りま のご兄

を自負しておりましたが縁があり、 ということは自立できておりますの て殺生与奪の命を授けられるという希有な存在と相成り申した。 八代将軍徳川吉宗さまの絶大なるご信頼を得 で誰に仕えるわけでもなく、そもそもが 浪人

事実我らの家族には元公儀御庭番もおりますほど、 幕閣にもその存在を知られ

そして… おる屋敷なのです」

古に来ていること。 向こうに春江館とい う剣術道場があり、 水戸や尾張の家中からも柳生新陰流

その奥には診療所があり男の医者三人と女医者一人で一日少なくても百数十人の 患者を診ていること。

そして屋敷の全員は子供二人を含めて十六人が暮らしているが、男手が少なく今 般よい人物に巡り会えれば数人の武士に仕官してもらい、新たに家臣団を作りた のだといった。

のですが代替わりして今では剣者はそれがしと妻の蘭、そしてそれがしが師と仰 それがしは三代目の当主。しかし女手はともかく昔は腕の立つ剣者が多々い でいる米道夏穂さまの三人となってしまった…」

しばしの間を置いた後に、

失礼ながら腕が立つなら是非師範代や師範として門弟達の指導を願いたいがそれ 「家族となってもらうお方に期待することは取り急ぎ道場の運営の手伝いじゃ。

だけではない」

「はあ…」

「我らは役目柄の上下関係はあっても身分の高い低いはない。 したがってそれが

しも時に率先して畑仕事もする。

そしてひとたび一大事となれば命をかけて屋敷を家族を守り、 時に上様の意を汲

んで動く…。

とまあ言葉にすればこういうことだが、やはりよく分からん屋敷かな…」

と藤九郎は苦笑した。

「ところで貴殿の腕前はこちらの静香から聞かされておったが、 やはり新陰流で

ございますかな」

藤九郎が話柄を変えた。

「さようでございます」

久世仙之助が答えると静香が、

「過日は剣を抜かずの技、 感服いたしました」

というと久世仙之助は恥ずかしそうな顔をし、

「いやあ、お恥ずかしい。

実はそれがしの刀は竹光でしてな。抜いたところで人は切れませぬ

と言うと藤九郎と静香が顔を見合わせ、三井高清が手を口に当てて笑った。

ふと久世仙之助が真顔になり、静香を凝視しつつ、

静香さまはどうやら女子の身でありながら凄腕

0

ようでございますな」

「それがしのことはともかく、

と問うた。

藤九郎はにやりと笑いながらも、

「それはまた後のお話しといたしましょう。

いまは貴殿のことを多々知りとうござる」

と話を戻した。

すると高清が、

「商人が口を出した方が話しが早いかと思いますが藤九郎さま。

久世さまからしてみれば、御屋敷のあれこれは後でお知りになれるとしてもいわ

ゆる俸禄はどのようなことに相成りましょうか」

と口にした。

気遣いもなく手数料を取られることもありませぬ 「さよう。我らは米では無くすべて金でお支払いいたす。したがって札差らへの

そしてもし、久世殿が我らの目にかない、また幸いにしてお仲間になってくださ

るとすれば、向こうの離れをお使いいただくと共に支度金五両と年俸五十両とい

ったところからになり申す…」

藤九郎が言い終わらないうちに、

久世仙之助が声を上げ高清も驚いな「ご、五十両…でござるか!」

当時は現在と物価も価値観もまったく違っていたが、一両あれば何とか家族 人四人が一ケ月は暮らせる時代だった。また一般的な武士の年俸は家付きで五百

万円といったところが相場だったと考えられるが、俸禄が米であったために換金 の米相場に左右されるだけでなく、当然のことながら札差やらの手数料

れ、その実体はかなり目減りすることになった。

ということで一両を無理矢理現在の貨幣価値に直せば十万円から二十万円といっ

内にお加えくださいませぬか。

たところだったと考えられる。

う。 仕官してくださる者が数人になればまた何棟か新築しようかと考えております。 久世殿に奥方さまやお子がおられれば無論ご一緒に住まわれれば宜しいでしょ 「屋敷は母屋にも部屋が空いておりますし、離れもひとつ空いております。

また特別の場合を除き、日々三食は当家の伝統でございましてな、一同うち揃 て膳を囲 んでいただきますので実質食事代もかかりませぬ」

と藤九郎が続けた。

すると久世仙之助が口を開く前に三井高清がガバッと両手を突き、 「藤九郎さま。差し出がましいとは承知しておりますが是非是非久世さまをお身

手前は約二年ほど家作でお住まいになられている久世さまを承知しております。 .事などで生計を立てていらっしゃいますがご苦労の連続と拝察してお お叱りを覚悟で申し上げますが、近所の子供たちに文字を教え、奥方さまは りま

これまた僭越ですが、 久世さまおよびお内儀さまの人物はこの高清が保証 ζ) たし

と笑った。

) よう。

ですからなにとぞ御仕官が叶いますよう伏してお願い申します」

江戸一番の分限者である越後屋の主人三井高清が藤九郎に平伏すると驚いた久世

仙之助も嗚咽 しながら平伏した。

藤九郎は再び静香と頷きあい、

「ご両人、お顔を上げて下され。

我が城の老中のひとりでもある静香のお墨付きも出たようじゃ。

うぞ」 ということで久世仙之助どのを我が屋敷最初の武官としてご奉公いただきましょ

藤九郎が冗談交じりにそう言うと久世仙之助と三井高清は再び頭を下げたが、 香は小さな声で、 静

「老中とはまた、 女賊も出世したものでございますな」

三日後の午前中、 風呂敷包みを背負っただけの久世仙之助と妻の美和が引越のた

めにやってきた。

だった。 たのが印象的だった。そして最初に命じられたことは診療所で診察を受けること 子と奈美が部屋の箪笥に揃えておいたので美和が感激してうずくまって泣いてい 一人は空い てい た離れ の一室を与えられ、 寝具はもとより取り急ぎの袷なども秋

それは当主松平藤九郎自身が体を壊して苦慮した体験からまずは健康であるかど

無論美和の診断は女医者のお輝が役目であった。うかの確認をするためだった。

なることを宣言した。

その昼餉の場で藤九郎は皆に仙之助と美和夫婦を紹介し、今日から屋敷の一 員と

その後、道之助の案内で屋敷の中を見て回った仙之助はやはり春江館の扁 で足を止めた。 額 の前

座 でいたのを見た仙之助は引き寄せられるように道之助を残したまま道場に 一礼して玄関を見通すと奥の神棚の前に白髪の京人形のような夏穂が座禅を組ん ŋ

之助は自分でも何故だか分からないままに涙を流しながら夏穂に近づいてい しばらくすると気配を察したのか夏穂が体をこちらに向けて微笑んだのを見た仙

た。

微笑みながら夏穂は、

おりましたが嬉しゅうございます」 「ようお仲間になってくださいましたな。剣者が少なくなって寂しい思いをして

と声をかけた。

館長を藤九郎さまにお譲りし気が楽になりましたが、できることなら久世さま。 「十四歳でこの春江館に弟子入りしたわたしもすでに齢八十二になりました。

藤九郎さまを補佐し、師範…いや館長となるべく精進してくだされ」

と話した。

「はっ。ありがたきことによきご縁をいただきました。一命をかけてご一同と共

に励む所存です」

仙之助はそう言いながら夏穂に平伏していた。

まだ一度も木刀すら交えていなかったものの、 仙之助には夏穂に尋常ならざる強

さを感じたからでもあった。

「はつ」

「久世さま」

「せっかくでございますのでご挨拶がてら竹刀を交えてみましょうか」

と夏穂が誘った。

二人は神棚に礼拝し、道場中央に二間ほどの間合いをとって袋竹刀を構えた。

両者共に青眼だったが、仙之助は人形のように小柄な夏穂を眼前にすると急に大

きな存在に感じられただけでなくすでに圧倒されている己を感じた。

仙之助は構えながら切っ先を揺らすと夏穂は左足を少し前に出し、竹刀の切っ先

をその足先に置いた。

静かだが緊迫 の一瞬の後、 仕掛けたのは仙之助だった。

同時に夏穂は軽やかに裾をさばいて前に出た。仙之助には夏穂の両足がまるで浮

いているように思えた。

見る間に間合 いはつまり、 つぎの瞬間、 仙之助は双手中段の太刀を右手に取

払い打ちにかかった。

夏穂 く打ち据 の竹 力は えていた。とても八十二歳の動きには思えなかったが、 7 つ動 いたか、払い打ちを押さえた刹那 上段から仙之助の右 無論 真剣なら仙 手を軽

「ま、まいりました」

之助の手首は

切断されていたはずだ。

仙之助はその場に座し、丁寧に頭を下げた。

「いまの払い打ち、お見事でした。

あれを防げるお人はそうそうおらんでしょう。励みましょうぞ」

夏穂は破顔しながら道場を後にしたが、仙之助はしばしそのまま動 けなか つ

方、 妻の美和は秋子にあれこれと屋敷の決まり事などを教わってい た。

秋子自身、父助左衛門と共に享保十九年だからいまから五十八年前、やは 屋の家作から春貞 しながら美和の問いに丁寧に答えていた。 の屋敷に移った経緯があり、 そのときの感激を懐かしく思い り越後

ずに済むことがこれほど幸せなことなのかを改めて知りました」 「秋子さま。お恥ずかしい話しですがその日その日に口にする食べ物の算段をせ

美和が浪人の妻の立場をしみじみと口にすると秋子も、

「若いときの私も同じでございました。

夫となる万之助さまが初めて長屋においで下さった際にも茶はだせず、 白湯で歓

迎の意を示すのが精一杯でございました」

と話しかけた。

また美和は武家の娘だったこともあり、 秋子と話しが合い、 料理の経験もあると

甲斐甲斐しく世話を始めたが奈美は、 のことなので秋子を喜ばせたし日常の屋敷の細かな日常については奈美とお文が

「嗚呼、失礼ながら久世さまのお名は私の父上と同じお名でございますな。懐か

しい

と涙ぐんだ。

ぎたことになる。 が、金目当ての中間に殺された。奈美は敵を討ちたい…強くなりたい一心で春江 館にやってきたのだった。二十二歳のときだったから早くも五十六年の歳月が過 奈美は七十八歳になっていたが、奈美の実父は木更津の代官の石川仙之助だった

早急に覚える必要があった。 ともあれ仙之助にしても美和にしてもまずは屋敷に一緒に暮らす者達の顔と名を

=

さて、 だった。 久世仙之助 無論 |期限が決まっていたわけではないが…。 の初仕事は道場を手伝 いながらも後四、 五人の家臣を探すこと

どを教授されていたが、もともと腕が立つ男だったから覚えは早かったし、 間に藤九郎は 毎日藤九郎や夏穂と木刀を交え、春江館での門弟への接し方から指導のやり方な 勿論、 静香が久世仙之助の人物を見極めることを忘れなかった。 その

そして半月が過ぎた…。

寛政五年(一七九三)も師走に入った夕刻、 ていたが何故かその場に夏穂もいた。 仙之助は藤九郎に呼ばれて居間に座

「お呼びでございますか」

仙之助は少々緊張しながらも藤九郎の前に座り頭を下げた後、 隣に座している夏

藤九郎は、

穂にも頭を下げた。

ただいまよりこう呼ばせてもらう。もう少し近う…」

と言いながら背後から一振りの刀を仙之助の眼前に置いた。

「この半月ほどの間、お主の働きぶりを見ておったがまだ縁は浅いもの

それ

がしの右腕として適任であると見定めた」

「ははつ。ありがたき幸せ」

仙之助は平伏し頭を上げると藤九郎と夏穂は笑みを浮かべながら、 「仙之助。他でもないが、当主の右腕が竹光では恰好がつかぬであろう。

でな、この一振りをお主に託すので使いこなしてみろ」

と言った。

「あ、ありがとうございます。

拝見させていただきます」

仙之助はそう言いつつ、懐紙を口に咥えて大刀を手に持ち、 切っ先を上に向けて

鞘を払った。

「むっ」

しばし抜き身の姿を凝視していた仙之助は深い呼吸後静かに刀を鞘に収め、

「鍛えは板目肌が流れ肌立ち、そして鎬地柾目…。

また棟の重ねが薄く鎬筋高い造り込みで見事な三本杉の焼刃・・・。

これはまごう事なき孫六兼元の名刀ではございませぬか

と感嘆の声を上げた。

す。

「さよう。その一振りは夏穂さまの夫、 米道格左衛門どの愛用の一振りだそうで

元々は春貞さまが尾張に旅をされた際に八代藩主徳川宗勝さまより拝領した二振

りの孫六兼元のひとつで、後に春貞さまより格左衛門どのに下げ渡された逸品と

お聞きしています。

この度、夏穂さまよりお主に使ってもらいたいとのお言葉故です」

藤九郎が説明すると夏穂も、

くですから格左衛門さまが愛用された脇差し共々お身に着けていただければ幸 「是非使ってくだされ。あなた様なら難なくお手に馴染む物と思いますしせっか

\ ::

と言い切り、 仙之助は感激のあまりにその場に突っ伏した。

もいた。 をしている人たちが朝から押しかけていたが、百姓町人だけでなく中には浪人者 方向島診療所は地味な活動ではあったが、 相変わらず町医者にもかか れず難儀

「さっきさ、ちょいと見えたんだけど見かけない若い女がいたね。 診療所

りかい」

遠慮の無い者たちが待合部屋で雑談をしている。

「いや、あたしが聞いた話しではお侍さまがお一人仕官されてさ、 お内儀と一緒

にこられたという話だよ」

と聞いたよ。だからそんな話があってもおかしくはないけど最近では珍しいよ 「へええ。ここはそもそもお武家の御屋敷だし公方さまも立ち寄られるところだ

「おうさ。新しい当主さまが御屋敷の若返りを図りたいと腕の立つお侍を探して

いるという噂だあ 「なに馬鹿いってるのさお兼さん。この奥にあるやっとうの道場の先生方を募集 「ほう。この泰平の世にお武家を集めてどこかへ討ち入りにでも行くのかい…」

しているという話しですよ」

らんさ。こんな世情だからねぇ。そしたら困るのはあたしら貧乏人だよ。 「なんにしてもだ、 御屋敷が元気でないとこの診療所だっていつ無くなるか

だからさ、御屋敷が元気でないと困るんだわ。そうでしょあんたらあ」

大きな声で言いたい放題の待合室だったが、四半時後に井之上新一郎の前 に座 つ

「若先生。いまた若い武家が、

当ですかな」

「若先生。いま待合部屋で聞いたのだが、腕の立つ者を探しているというのは本

と問うた。

脈を診ていた新一郎は、顔も上げずに、

「神保どのでしたな。 確かに我らの屋敷はお陰様でこうして医者は働き盛 りの男

とはいってもこればかりは…仕官となれば腕が立てば誰でも良いという訳にもい もいるが、道場の運営は高齢化が激しくてなかなか大変らしいのです。

きませんからな。

でも過日やっとよいお人がひとかた来られたので喜んでいるのですよ」

新一郎は風邪を引いたという侍に律儀にそう説明した。

口を開けて喉と舌を診た新一郎は、

い風邪ですから心配はいらないと思いますが、薬を三日分出しておきますの

で朝晩の飯の後に飲んで下され。

それと失礼ながらもっと食べないと体力がつきません。お辛いお立場でしょうが よろしかったらそこの甘藷を数本お持ちなさい」

と話すと、

ぬ :。 代わりと言っては語弊があるが、道場の手伝いなら拙者にもできるかも知れ 「済まぬ…。これで診ていただいたのが三度目だが相変わらず金が払えぬ。その

先生、それがしをその仕官候補としてご紹介いただけまいか」

痩せてはいるが端正な顔立ちをした武士が新一郎に頭を下げた。

それはそうと、お文さん。済まないが神保さんをな、久世さまのところにご案内 「お金ならお気になさらずに。ここはそうしたための診療所ですからな。

してくだされ」

新一郎が願うと無言で胸を叩いたお文が、

「ではこちらへ」

と神保と呼ばれた若い浪人を春江館へ誘った。

「失礼いたします。久世さま…」

道場で木刀を構えていた久世仙之助はお文の声で形を解き、 神棚に一礼して玄関

側に寄ってきた。

「新一郎先生からの言いつけですだ。

このお方が…新保さまとおっしゃいますが、 仕官なさりたいとのことでお連れ

たしました」

「お文さん、ご苦労でした。

新保どの、こちらへ…」

久世仙之助は浪人と思われる若い武士を道場に上げた。

浪人は神棚に丁寧に頭を下げた後、 仙之助に誘われて床に座した。

「神保金之助です」

「久世仙之助です」

と挨拶が終わると神保と名乗った男は、

これほど素晴らしい道場とは思いませなんだ」 「それがしは診療所で世話になったのですが、 奥に道場があるとは聞いたものの

と見回しながら感嘆の声を上げた。

頷きながら仙之助は、

はでき申さん」 て一緒に住み暮らすとなれば単に腕が立つというだけでは家族として迎えること 「さて神保どの。確かに我らはよき人材を探しています。ただし当家の方針とし

「か、家族でござるか…。家臣ではないのですかな」

「それがしも幸いにして仕官を許され一ヶ月半ほどしか経っておらぬから偉そう

なことは申せぬが…。

確かにそれがしは家臣です。当主松平藤九郎さまを頭としてその補佐とそれぞれ 敷や大切な者たちを守らなくてはならぬ」 のお役目をしっかりとこなさなければならぬし、 いざ鎌倉となれば一命をかけ屋

しない

取らされ藩を追放されたが、思えばここは変な屋敷よ」 倒されることも折檻されることもない。 「ただ、普段は家臣というより家族の一員として暖かく接してもろうておるし罵 まあそれがしもとある藩で一揆の責任を

仙之助は楽しそうに笑った。

「まあ、それはともかく、お主は何流をお使いか?」

仙之助が聞くと神保金之助は、

「無外流でござるが、流派の違いはダメですかな」

と心配そうに問うた。

当道場はそもそもが尾張柳生新陰流であったし当主藤九郎さまもそれがしも新陰 「普通の道場ならそうでしょう。 しかしこれまた面白いといっては語弊がある。

ħ

しかし流派には拘るなと言い聞かされております」

一息ついた仙之助は続けて、

「確かにこの道場の運営をお手伝いいただく必要があるが、それはお役目のひと

つでござる。

どこかでお耳に入ったかと思いますが、当家は公方さまや大藩の藩主さまが来訪 される屋敷、なにがあっても藤九郎さまの命とご決断に従い命を捨てる覚悟がな くてはなりませぬ。 そのお覚悟はございますかな」

「それがしも武士の端くれ、 お仕えした方にこの命をお預けするのはやぶさかで

「しかし…」

はございませぬ。しかし」

それが正義であり天に背くものでなければ…という前提があるのではご

ざいますまいか。

それがしはご覧のような若輩者ですが、実は上司に理不尽な命…同輩の暗殺を命 じられ、それを断ったがために放り出されました」

「なんと…」

「要領が悪いと言われればそれまでですが、それがしにはどうしても出来ませな

ん た し

神保金之助はその時の無念を思い出したのだろう、唇を噛んだ。

しばし無言でいた仙之助だったが、はたと膝を叩き、

「では神保どの。しばし通いで屋敷においでくださらぬか。 いわばお試 し期間で

ござる。

失礼ながら当方にとって難がなければおぬしを家族に迎えいれようではないか。

いかが…」

と破顔した。

「嗚呼、ありがたき幸せにござる」

神保金之助は仙之助に平伏し、明日の早朝からしばし屋敷に通うことにな

った。

実は神保金之助と同時に仙之助の推挙により長坂角之新とその妻淑子が加わるこ

とが決まっていた。

その為だろう、 四棟ある離れの隣に幾棟かの住まいの普請が始まっていた。

匹

寛政六年(一七九四)の正月は屋敷にとってこれまでになく賑やかな始まりとな

った。

美和と角之新の妻淑子という女衆二人が加わったからであった。 藤九郎とお蘭の息子春幸の存在はもとより久世仙之助、すでに正規に取りたてら れた神保金之助そして長坂角之新という男性陣が増えたこと。 そして仙之助の妻

まだまだ屋敷のあれこれについては慣れないことばかりだったが、

若い女手が一

人増えたことから正月の支度を取 り仕切った秋子の喜びようはなかった。

そして元旦の朝は屋敷の全員が大広間に集まった。

上座には藤九郎とお蘭、 お蘭の膝には数え年二歳の春幸が抱かれていたが、 その

隣には夏穂が 、藤九郎の隣には新界と静香が座していた。

この屋敷で初めて正月を迎えた久世仙之助夫婦、 神保金之助、 そして長坂角之新

「おめでとうござる。

夫婦は膳の豪華さに驚愕していた。

膳を前にした挨拶など無粋だと承知はしておるが、 してお役目第一に過ごしてくれるよう願っておる。 今年もそれぞれが健勝で、 そ

ではいただこうぞ」

藤九郎の簡単な挨拶を合図にそれぞれが、

「おめでとうございます」

「今年もよろしゅうに」

などと歓喜の声が飛び交った。

しばしの時が経ったとき、

「そういえば松之助、いくつになった」

と藤九郎が問うた。

「はい。十四になりました」

松之助がはきはきと答えると藤九郎は、

「お文さん。今年のよき時期を見計らって松之助の元服を執り行おうぞ」

と呼びかけた。

「と、殿さまあ。げ、元服でございますかあ。

松之助はあたしの息子…。いわば百姓の倅でございますよ」

お文が驚いて声を上げると一同が笑顔だ。

松之助をゆくゆくは春幸の養育係に…という話しはまだ公言されていなかった。

当の松之助も己が捨て子でこの屋敷とお文そして乳母のおたみに育てられたこと は承知していたが、素直な男子に成長しいまでは春江館で日々新陰流の稽古も続

けていた。

「お文さん。確かに松之助の母親はお前さんとおたみさんだ。しかしな、父親は

この松平家という屋敷ぞ。

生まれがどうのというより皆のおかげで良い男に育っておる。

是非な、皆で松之助の元服を祝おうぞ」

藤九郎が盃を空けていうと一同から「わああっ」と声が上がり、 松之助が平伏

お文が泣き出した。

「それから松之助に命じることがある」

藤九郎が言葉を改めて宣言したので一同が注視すると、

「松之助。元服後にお前を春幸の守り役、養育係に命じる。

よろしゅう頼むぞ」

藤九郎の言にお文の嗚咽が増した。

「これこれ、お文さん。目出度い席に涙は禁物…」

と静香がいうと、

「静香さま、うれし涙ですだ」

お文の嗚咽は大きくなった。

当の松之助は何が何やら分からない様子で困惑していたが、藤九郎に丁寧に頭を

下げていた。

一息入った頃、仙之助が、

「しかし、驚きましたな」

と口にした。

「何がですか」

隣に座している道之助が顔を向けると、

「この膳の豪華さです。藩でお役に着いていたときもこれほど豪華な膳は見たこ

ともございません」

仙之助が酒で赤くなった顔を上げて唸った。

「確かにな。俺も長い浪人暮らし、一時期旗本の客分であったがそれでもこれほ

どの料理にはお目にかかったことはないな」

藤九郎も頷きながら焼き魚に箸を向けた。

「お殿さま。それもこれも秋子さまが二ヶ月も前からいろいろとご準備なさった

お陰でございますよ」

まだ涙の跡を残したお文が声を上げると、

「そうだな。皆で感謝しようぞ」

藤九郎が呟くと、

「身に余るお言葉。ありがとうございます。

しかし毎度のことですが奈美さんは勿論、今回は美和さん、淑子さんとお手伝い

いただけましたので楽でございましたよ」

秋子が笑顔で言うと美和と淑子は顔を横に振った。

「それから…仙之助」

再び藤九郎が声をかけた。

「はつ」

「昨年は嬉しきことにお主は勿論、 角之新と金之助という同士を得た。しかし夏

穂さまや静香さまと話しあったが、 できれば後二人ほど良き武士が欲しい。

引き続き探す努力をしてくれ。

ただし無理をしてはならぬぞ」

「承知いたしました」

仙之助が頭を下げた後、真顔で藤九郎に体を向けた。

「藤九郎さま…」

「うむ」

「この目出度い席、 酒の勢いを借りてこれまで気になっていたことを申し上げた

いのですが」

「ほう。何なりと申してくれ」

仙之助 「ただいまのお話しのように当御屋敷も我ら家臣が少人数ながらも揃ってまい の態度からそんなに深刻な話しではなかろうと藤九郎も笑顔で応じた。

ŋ

ました」

うむ…」

ご当主さまをお名でお呼びして宜しいものでしょうか。 「藤九郎さまは堅苦しいことは苦手だと常々おっしゃっておりますが、そもそも

特に第三者がおられる前で藤九郎さまとお声をおかけするのは正直些か迷いが生

じます」

仙之助が言うと角之新と金之助が頷いている。

「先ほど、お文さんは 『殿さま』とお声がけされ ましたな。

我らも殿さまと申し上げるべきではございませぬか…」

仙之助が言葉を繋ぐと藤九郎は苦虫を潰したような表情となったので夏穂と静香

が声を上げて笑い出した。

仙之助が言うには、そもそも規模はともかく大名であろうと旗本であろうと当主 を名で呼ぶことが出来るのは身分の高い者たちのみであり、家臣は皆一様に

「殿」と称すのが普通だと主張した。

衆らと称する家臣団の区別をはっきりすべきではないかと話した。 だから一般的 また己らはまだお仕えして時期が短 な大名屋敷に準えれば一門衆、譜代、 いからこれまでの状況を知らな 家老そして直臣 ·陪臣 ر *ا* ょ ・奉公 *()*

「仙之助。お主、若い割りには古くさいのう」

藤九郎も苦笑いしたが、お文が、

「その…ご家老というのは分かる気がしますが一門衆、譜代、 直臣・陪臣・奉公

と聞いた。

衆って何のことですかな」

すので静香さま、佐吉どのそれに新界先生ら診療所の先生方、道之助どの、そし 譜代とは一般的に遠縁の親戚にあたる家臣や、先祖代々仕えてきた家臣を指しま 蘭さまと春幸さまそして初代当主様の御養女夏穂さまがそれにあたります。 て秋子さまや奈美さまでございましょうかな。 「一門衆とは当主と血縁関係のあるお方たちのことです。したがって当家ならお

これら家臣団の一番上位の役職ですな」 直臣・陪臣・奉公衆はその名の通り我ら家臣や奉公衆のこと。 ちなみに家老とは

仙之助が丁寧に説明すると、

「なるほど。だども、なかなかに面倒でございますね」

お文が遠慮無い物言いをすると、

「武家の世はその面倒の塊でできているようなものよ。

実際日々の生活においてはお文さん。働き者のあなたが一番偉 7 0 か も知れませ

んな」

藤九郎が冗談をいうとお文は、

「あたしはそんなに威張ってますかね、お殿さま」

と口を尖らせつつもふと眼前に座している美和と淑子が涙ぐんでいるのに気付

と声をかけた。

「いかがなされましたか、お内儀さま方…」

「も、申し訳ございませぬ。

あまりにも豪華で美味しい料理の数々…。 お恥 ずか い話、 つい 先日までの長屋

住まいを忘れてしまいそうで怖いと、 いま美和さまとお話ししていたところなの

です」

淑子が美和と顔を見合わせて頷いた。

藤九郎も破顔しつつ、

「仙之助。お主の思いはありがたくしかと受け止めたが、 その儀はいましばらく

と結論づけた。

置いておこうぞ」

五.

り小川丹治(二代目と同じ名)が吉報をもたらしてくれた。 たが、それらの中で両替商相模屋の二代目清右衛門と小石川養生所の三代目肝煎 三日には親しい出入りの者たちは勿論、 商家の主人たちや蘭方医らが集まってき

清右衛門は、

「こちらではよきお侍さまをお捜しとか。

手前どもにお一人心当たりがありますので一度面通しでもしていただけないかと

思いまして…」

と話し出した。

聞けば一年七ヶ月ほど前から相模屋の用心棒で生計を立てている浪人者だとい

う

「これが、手前が言うのも変でございますが用心棒にしておくにはもったい な

「ほう」

お方でございましてな…」

柄が宜しい。 「腕が立つのは無論のこと、右筆のお役だったとかで達筆。 ただひとつ難があるとすれば…」 そして何よりもお人

「難ですか」

ざいませぬし多少の礼金を増やすのに吝かではございません。しかし、ご本人の 為を思えばこちらの御屋敷に仕官できるとなればあのお方にとって最良の人生か と思いまして」 ただし、本音を申せば用心棒として最良のお方でございますので手放したくはご 「大食漢だということで、手前どもの礼金では到底苦しいそうでしてな。

藤九郎が機会を作ってくれるよう願った。 「なるほど。清右衛門どのが惚れたお方ならお会いしてみましょうかな」 倒

してしまいました。

れた患者だったという。 方、小川丹治が紹介したいとする人物はもともと栄養失調で養生所に担ぎ込ま

清いといえばそれまでだが、長屋の連中からの施しも受けず餓死する覚悟だった というが、見るに見かねた隣の後家が養生所に運び込み一命を繋いだらしい。 「いやはや、昔は随分と無頼漢が養生所に因縁をつけてきた例がございますが、

体ひとつで、それはまあ見事な技を次々と繰り出してあっと言う間に七、八人を ざいましてな。 そのお方、土屋長四郎さまと申されるのですが二度ほどお世話になったことがご お侍さまには違いないのですが柔術の名手のようなのです。

昨今もなくなったわけではありません。

とても温厚なお方です。 は い。人物も人によっては取っつきにくいと思われるかも知れませんが、 普段は

すし、 僭越ですが藤 ご本人の為にもなると思いましてな」 九郎さま。こちらの御屋敷ならお役に立てるのではないかと思 ζ.) ま

丹治は熱心に話した。

ということで一月中に二人に来訪してもらうことになったが、 最初の見定め役は

久世仙之助に任された。

この頃になるとやっと新たに五棟の住居が完成した。

それぞれは小ぶりながら同じ広さ、同じ間取りだったが、土間の他三部屋が整

てした

一人でやってきた土屋長四郎は二十五歳だというが歳より老けて見えたのはその

落ち着いた言動からかも知れない。

久世仙之助は挨拶を終えた長四郎に向かい、

ちらもかなりの使い手のようですがなぜ刀を捨てられましたの 「貴殿は柔術の名手とお聞きしたが、もともと両刀を携えていたと見ました。そ か

と問うた。

「ほう、おわかりですかな…」

「部屋にお入りになる時拝見しましたが、 武士の倣いと申しますか、 左肩が少し

下がっておられましたのでな」

仙之助は笑顔で理由を話した。

「さすがでございますな。剣を携えておれば時として抜かねばならなくなりま

す。 抜けば斬らねばなりませんが、 人を斬ることがどうしても嫌になりまして

な…」

「なるほど」

「とはいえこの身は守らなくてはなりません。

たまたま知り合いに七十を超えたであろう竹内流柔術の名人がおりましたので入

おお、これは恐縮…」 門したのがきっかけでした。

らか、話に聞 おたみが運んできた茶に手を伸ばした土屋長四郎は自ら望んでこの場所に来たか いた取っつきにくさは感じられなかった。

っぱら小太刀のみ使い、 「竹内流には 無論剣術、 組み打ちや組み伏せて縛り上げる技を習いました。 居合あるいは薙刀も含まれておりますが、それがしはも

幸い師匠は枯 蠅きことを申しませんので後は勝手に工夫を重ねております」 れたお方でしたので、流派の厳しき決まり事や伝統云々という五 月

土屋長四郎の話しが一段落すると、仙之助は当主の右腕となる家臣団をとよき武 士を探していることを話し、この屋敷独特な慣習や取り決めといったあれこれを

説明した上で仕官の条件も淀みなく伝えた。

「か、金で五十両でございますか」

った者であれば皆一緒で区別・差別はござらぬ。それがしも同じ条件でお仕えい 「はい。他に支度金五両をご用意いたします。これは当主藤九郎さまのお目に叶

たしましたでな。

さらに飯は一同に会して食す習慣なので己の懐は減りません」

と仙之助が冗談交じりに破顔すると長四郎は、

「決して金で釣られるつもりはござらぬが、これで所帯を持つことができるやも

知れませんな」

と初めて笑顔を見せた。

「ほう。失礼ながら思い人がおられましたか」

仙之助が問うと、

したので命を繋ぐことになり申した」 うとまで考えましたが、お染…いや、隣に住む後家が養生所に運び込んでくれま 「意固地なそれがしは食えぬならいっそのこと壁に向 か って座 ったまま自害しよ

長四郎は頭を掻きながら、

てな。仕官が叶うなら所帯を持とうかと夢見ておったのです」 「人付き合いの下手なそれがしですが、情にほだされその女とできてしまいまし

と照れた。

己も長い間妻と共に浪人暮らしが続いた仙之助だったから、長四郎の気持ちは痛

いほどよく分かった。

「いや、それがしも女房持ち。好きな女子のために働くというのも男の生き甲斐

でござるよ」

と言いつつ、この奥に新築の住居が与えられるからその女子と共に移られるのが よろしかろうと言い、良ければこの屋敷で祝言を挙げろと話した。

「嗚呼。そのような勝手が許されますか」

「はい。ただし…」

「はっ」

「藤九郎さまの命に背くことなくお役目第一に勤めなければなりませぬ」

仙之助が言い切ると長四郎は、

「よろしくご推挙願いたく、お願い申します」

と両手を突いて頭を下げた。

挿しの刀を抜き、座す際に後ろに配した男は両手を膝に置き「相模屋さんの用心 の五 日の後に相模屋清右衛門に連れられ巨漢の男がやってきた。 袷 1の帯 に一本

棒、天野三十郎でござる」と名乗った。

清右衛門の方が些か緊張気味なのが仙之助には愉快だった。

「どのような話であるかは相模屋さんからお聞きでございますかな」

仙之助が話しを向けると大きな体を少し揺らしながら、

「はい。江戸にこのような御屋敷があるとは知りませんでしたが、いまひとつよ

く分かってはおりませぬ。

縁があるならこの命、 しかし失礼ながら清右衛門どのが全幅の信頼を寄せられているという御屋敷、ご お預か りいただきたい」

天野三十郎が頭を下げると仙之助は、

「天野どのは何流をお使いか」

と問うた。

「はい。剣より槍術が得意でございましてな、宝蔵院流でござる。

剣は縁あって天流を学びました…」

「ほう。 天流と槍といえば斎藤伝鬼坊を彷彿とさせますな」

仙之助がいうと、

くの昔に質草となり流れてしまいましたがな」 「それほどの使い手ではござらぬ。とは言っても長い間 の浪々の身、 槍などとつ

と笑った。

「ところで禄高はお聞きかと思いますが年俸五十両からとなり、 別途支度金が五

両と相成ります」

仙之助が念の為だと説明すると、

「過分な額です。それに匹敵するご奉公ができるよう、また推挙いただいた清右

衛門どのの顔を潰さぬよう励みますので宜しゅうお願いいたします」 天野三十郎が大きな体で平伏すると隣の清右衛門がクシュンと鼻を鳴らした。

結局一月の末日には土屋長四郎、 天野三十郎が採用となり久世仙之助を含めて新

たな武家家臣団五人が揃った。

最初に一同が居間に集まって夕餉を囲んだとき、 それぞれには新築 の屋敷が与えられた生活が始まった。

「お殿さまあ、やっぱり御屋敷らしくなりましたよ」

のお文の奇声で一同が和んだ。

膳 それまで愛嬌を振りまいていた天野三十郎が急にしおらしくなっているのに気づ いた井之上新界が の準備と手配をする秋子、奈美、 美和そして淑子らは些か大変だったようだが

「天野さん。いかがされましたかな」

と声をかけた。

「は、はい。これだけの飯が食えると思ったら涙が出ましてな」

巨漢の肩が揺れていた。

「なにを言ってるだか。お侍さまらしくないですよ天野さま」

遠慮の無いお文が励ますと、

「天野。お主は俺の倍ほどの体格。大食漢だと聞いておる。

皆の者も天野に限らず、遠慮のうお代わりしてくれ。

そしてな、 ただし、飯のお代わりは自分でよそるのがここの決めごとだがな。 ゆっくりと食せ」

藤九郎が言うと五人が、

「ははつ」

桜 の季節を迎える季節となった。

が、ことはそうそう簡単なことではなかった。 彼らの実力と長所短所を知ることでそれぞれに適した役割を課そうと考えていた 朝早くから春江館では激しい稽古が続いていた。この二ヶ月余り、藤九郎は夏穂 の力を借りながら五人の家臣団たちの実力を探ろうと時間を割いていた。

五人の中ではやはり剣の技は久世仙之助が抜きんでていた。

が問題だった。 と夏穂は確信していたが、 長坂角之新と神保金之助は稽古を積むことで間違いなく一流の剣士 土屋長四郎の柔術と天野三十郎の槍の腕をどう図るか になるだろう

そこで水戸藩と尾張藩上屋敷から稽古にやってくる数十人の若者の中から四人を

選び土屋長四郎と対戦を試みることにした

長 ζ) 刀 郎 当 は 時 竹 内 は 柔 流 術 柔 (術と称してい とい う名は 用 たが、 11 な か 正 つ たとい 式な名称は 竹内流捕手腰廻小具足」たけのうちりゅうとりてこしのまわりこぐそく لح

心 歴史を遡る事 に成立 し、 本来 が 出 [来る最・ は捕 手術、 古の 羽手、 日 本 柔 術 小具足、 0 流派と言わ 捕縄 術、 れ、 棒術、 捕手と腰之廻小具足を中 剣術 居合、

薙刀などの総合的な技であった。

た。 長 四四 対し 郎 は て四四 小太 刀 人 \widehat{O} 0 若武者はそれぞれ手慣れた袋竹刀を保持して相対した。 代わりに同じ長さの木刀のみを右手に持って道場 中央に立

「はじめっ」

当 主 であり館 長 の藤 九郎が審判とあって全員が緊張していたが、 夏穂は見所 に人

形のように座していた。

郎 ば はすり足で半回転 らばらと四 人 ĺは 長 四郎を囲 しながら自ら仕 みながら得意 掛 け た。 0 姿勢か ら竹刀を繰 り出 たが、 長 四

倒 人 0 しにしつつ、 懐 に飛 び込み左手で稽 小太刀の切っ先を二人目に向けた。 古着 の禁 を掴 むと抵抗する力を利用して相手の身を

見 れ ば 四 郎 の足で若者は 腕 の急所 を踏り ま れ 動 け な ζ **)** で ζ,

刹 きた三人目の男の竹刀を打ち払ったと思ったら右足で相手の足を払って倒 四人目の男とぶつかるかと思った刹那、 那 小太刀は 倒れている若者の首筋を撫でるようにし 長四郎の体は相手の背後から首と腕関節 つつ飛び上がり突っ込んで しつつ

「それまでっ」

を決め動けなくしていた。

藤 なかったものの驚きと恐怖ですぐには立てなかった。 九郎の声で長四郎は素早く元の位置 に 戻 つたが、 四人は傷 つけられたわけ では

「長四郎。見事であった」

藤九郎の言に頭を下げて下がろうとする長四郎に声 がかか か つ

なんと井之上新界だ…。

「長四郎どの。お見事としか申す言葉がありませぬが、 この機会にこの爺のお相

手をしてくださらぬか」

と言った。

驚いたのは長四郎であった。

新 入りの長四郎はまだまだ屋敷の者達 の由来を良くは知らなかったが、 井之上新

よりも今年七十七歳の年寄りだと承知していたからだ。 界は診療 所 の肝煎りであり武士では なく蘭方医であると聞かされていたし、

があれば研鑽を積んでいた事も知っていたし現に今も時折道場に姿を見せること は承知していた。 一方、若い時に柔術を嗜み、春江館で弥三郎という公儀御庭番にも師事し、時間

長四郎の怪訝な表情を読んだのか新界は、

「柔術を習ってきたとはいえ私は素人。長四郎さんに敵うわけもありませんしご

覧のような年寄り。

しかし貴方の技を見て珍しく血が騒ぎましてな。

ご迷惑とは思いますが一手お手合わせを願いたく…」

と頭を下げた。

長四郎は藤九郎に視線を送ると頷いていることを確認し笑顔で、

「光栄です先生。それではお相手をお願いします」

と頭を下げた。

道場内は水を打ったような静けさとなった…。

ーはじめ!」

藤 九郎 の声で二人は二間 ほどの距 離 を持 って腰を構えた。

あっと言う間に組み合った二人だったが新界はくるりと腰が回ったと思ったら小

太刀を保持した長四郎を投げ飛ばしていた。

皆が 四郎は体を一回転しながらふわりと降りつつ左手を伸ばして組み打ちにか 刀を払った。 小太刀を新界の首筋に向けたが今度は新界はするりと長四郎の組み手を外して手 「あっ」と声を上げたほど新界の技は無理がなく自然体だったがさすが かり、 に長

と刹那体を下げた長四郎の足が新界の足を払い、 新界が仰向けに倒れ た::。

「嗚呼」

これまた声が 上が った瞬間、 新界は両手を後ろに伸ばして体を支え、その反

「それまでっ」

両足を長四郎

に向けて蹴った。

藤 九郎の言で長四 些か揃わ ぬ足取りで長四郎に向 郎は Š っと元 の位置に か い頭を下げた。 戻 ったが、 新 界は腰を伸ばしながら苦笑

「先生。驚きましてございます。

失礼ながらとてもお歳とは思えぬ攻防でございました」

の槍があっ

たので三十郎は

それを左手に携えて立った。

と長四郎が声をかけると、

ر ۲ ا やはや、ご覧のように息が上がっておりますし、 長四郎さんの手加 減 がなけ

れば命にかかわったでしょう。

しかしよき思 い出となりましたし長 四郎さんの強さの一端を拝見させていただき

ました。礼を申します」

と藤十郎

は、

新一郎は腰を伸ばして頭を下げ、 続いて見所に座す夏穂に頭を下げて壁際に座す

そう言いつつ一同を見回した。

「長四郎見事であった。また先生の技も眼福でありました」

続 なかったが、 いては天野三十郎の槍の番だった。 春貞 の時代に師範代として活躍した横手富三郎が愛用していた練習 ただし春江館に宝蔵院流 の槍があるはずも

「さて、三十郎の相手は誰がよいかのう」

藤九郎が一同を見回したが、 誰も手を上げる者はいなかっ た。

漢 の三十郎が槍を手にした姿はそれだけで仁王のように思え、 通 い稽古の若者

「゛:」が目はたようだった。

木刀を取りこ行く藤九郎こ、「では俺が相手をいたそうか_

「即官さた、即目らびごび、木刀を取りに行く藤九郎に、

「御館さま、御自らでございますか」

そういえばこの頃から久世仙之助は自ら藤九郎のことを「御館さま」と呼ぶよう 思わず家臣団では家老格の久世仙之助が声を上げた。

になった。

糺したが藤九郎に躱されたこともあって、それでは自ら先鞭をつけようと「御館 以前、家臣が当主を名前で呼ぶのは鳥滸がましいから「殿」と呼ばせるようにと さま」と声をかけるようになったのだった。

木刀を下げた藤九郎は神棚に一礼して天野三十郎の前に立った。

藤九郎は、

「いざ」

と声をかけ木刀を青眼に構えた後、 静かに体を半身に構えて切っ先を左前足に置

- 104 / 201 -

三十郎 はとい 、えば、 槍 の石突を右手で握り、 左手を前に構えたが、

 \mathcal{F} の藤 九郎 の姿が下げた木刀に溶け込むように感じられた。

毫躱され、今度は長さを生かして払 それでも三十郎は巨体に似合わずむ目にも止まらぬ早業で歩先を繰り出したが寸 17 に行った。

三十郎の槍が いところで両手に保持した槍に阻まれ、 ひゅんと唸った刹那藤十郎は飛び上がりそのまま切り下げると危な 両者はまた二間半ほどの間合いで相対す

ることになっ

た。

眼前にいたという防ぎようのない早さに思えたが、辛うじて巨体を転がして躱し 今度は藤九郎が動 つつ槍を向けた。 いた…といっても三十郎には迫ってきたというより気づいたら

とその槍は藤十郎の両足で踏まれて床にあったが三十郎が持ち上げようと渾身の けられてい 力で振ると槍にあわせて藤十郎が浮き上がり気がついたら三十郎に木刀が突き付 た。

「ま、まいりました」

丸 い体をさらに丸くして頭を下げた三十郎に藤九郎は、

「皆は気づかなかったと思うが、三十郎が宝蔵院流の槍を手にしていたならそれ

がしの首は繋がってはおらんかった」

と破顔し、

「存じておる者もいようが普通宝蔵院流の槍は十文字槍であったり片鎌槍であっ

たりする。

三十郎の槍がそれがしの鬢をかすめたときが数度あったが、槍の柄は回転してお った。したがって片鎌槍や十文字槍であったら大変な事になっておる。

三十郎見事であった」

藤十郎が三十郎をねぎらった。

とそのとき新界が、

「か、夏穂さま…夏穂さまあ」

と珍しく狼狽した声を上げた。

藤九郎も振り返って見所に座している夏穂にかけよると夏穂は笑みを浮かべつ

つ、背筋を伸ばして座したまま事切れていた。

帯には…享保十年というから六十九年も前のこと、夏穂十五歳のとき、八代将軍 吉宗から直接贈られた褒美の短剣があった。

夏穂はもともと仏壇仏具の大店、 太子堂長兵衛とお糸の一人娘であり、 十 四

のと

き春貞 逝った。 道格左衛門と夫婦になったが の妻である幸江 享年八十四歳であった。 に 憧 n 女の 春江 一館に入門した。 身で剣一筋という希有な人生を送った女剣士 その後春 貞夫婦 の養女とな り米

夏穂 敷の大広間 あったが の死去は藤九郎はもとより、 、 寛政六年(一七九四) で土屋長四郎 の婚礼が執り行われた。 は慌ただしくも過ぎ、その年の秋十月七日 新界ら屋敷の古株たちにとって大きな悲しみで

無論相手は長屋の隣に住んでいた後家のお染である。軣のプル間で「厚野区長の女者大幸に行すれず)

に 葉があったからだ。 かし、 「もし私が 夏穂 !の喪に服すべきと長四郎自身は辞退したものの、 死しても土屋長四郎どのの婚姻は一日も早くまとめるべし」との言 夏穂が残し た遺 書

ちなみに長四郎とお染は共に二十五歳の同 い年であった。

晴 れてお 染は 長屋 から屋敷へと移り長四郎と一緒に住むことになったが、

はまた女手が増えたと喜んだ。

当のお染めは が誰かも分からない貧乏長屋に生まれて長屋の生活しか知 棒手振 の女房だったが 四年前に夫に先立たれてい た。 らなかったから、 また生まれも

四郎 に連れられ初めて屋敷の門を潜った時は呆然としばし立ち尽くしていた。

「どうしたお染め。

ここが俺が仕官した御屋敷だ。

そしてな、 向こうに見える建屋のひとつが俺たちの住処だ。

やっと一緒に暮らすことができるぞ」

長四郎が声をかけたが、お染めにとって武家屋敷の内部など見た事もなかったか

らすべてが驚きの連続だった。

衆もいたし、特にお文は言葉使いは荒いが新参者に優しく接してくれたのでお染 ただしお染めにとって屋敷内には武家の女衆だけでなくお文やおたみといっ た女

は孤立しないで済んだ…。

_

そしてその翌月には松之助の元服の儀が執り行われた。

元服 は大人への通過儀礼であったが、 男子の場合はおおよそ十二から 十六歳に

なると行われるのが通例だった。

新一郎や吉太郎、 屋敷の氏神である三囲神社に詣でて大人の服に改め、前髪を剃って月代にするわ けだが、藤九郎をはじめ母親のお文とおたみはもとより、 そしてお輝を除いた屋敷の全員がうち揃っていた。その中でお 診療所を空けられな

文とおたみは泣きっぱなしだった。

その日の夕餉は秋子らが用意した祝い膳が並ぶ中、 全員の顔が並んだ。

滕九郎があら「松之助!」

藤九郎があらためて名を呼んだ。

「はい」

「いまこの時からお前は名を改め、藤文とせよ。

松平藤文だ」

「はっ、ありがたき幸せ」

平伏する藤文に、

「蛇足だろうが、藤文の藤はそれがしの名から一字、 そして文はお前 の母親の名

じゃ。

そしてな、 明日からお前を春幸の養育係および近侍に命じる。

ただし暫くは養育係・近侍とはどのようなお役目なのか、何をすべきなのかにつ いて知らなければならぬからその勉学じゃ。

細かなあれこれは明日静香どのから話しを聞け。

よいな」

藤九郎が命じると顔を硬直させた藤文は再び平伏した。

再び藤九郎がお文に向かい、

「お文さん。それから正式に藤文が春幸の養育係・近侍となった際には一人前の

家臣の一人として給金を支払う。

その件は道之助、手筈通り宜しく頼むぞ…。

そしてな、静香どのや秋子どのらに教わり、藤文の身支度を調えよ」

と言うと、お文は座すために義足を取っているため些か身動きにくい体を藤九郎

に向け丁寧にお辞儀をした。

「なんだかさあ、百姓の息子がお侍さまになったようだよ。

鳶が鷹を生んじまったあ」

祝宴)

を催したのだった。

このとき、

ロシアへ漂流した大黒屋光太夫なども招

お文が声を上げて嗚咽すると、

静香が諭すように言うとお文の泣き声が一段と大きくなった。 「お文さん。 なったようだ…ではなく本当に武家のお子となったのですよ」

歴代のオランダ商館長 た自宅の塾芝蘭堂に多くの蘭学者やオランダ風物の愛好家を招き、 れていたが、 たちによって行われた太陽暦 阿蘭陀正月とは、 月)の賀宴、 また寛政六年閏十一月十一日、 の弟子である大槻玄沢家塾芝蘭堂に江戸在住の蘭学者を招き新 月十一日が 江 戸出府でオランダ人と初めて対談した大槻玄沢は、これを機にこの年の閏十 阿蘭陀正月が開催され、井之上新界も招かれた。 西暦で一七九五年一月一日に当たることから、京橋区水谷町 寛政六年のこの年のヘイスベルト・ヘンミー(Gijsbert Hemmij) この時代に長崎 (カピタン)は定期的に江戸へ参府することが義務づけら (グレゴリオ暦) 「解体新書」の翻訳で有名な杉田玄白 の出島在住 のオランダ人たちや、江戸の蘭学者 による正月元日を祝う宴である。 元年(阿蘭 新元会 ·前野良沢 にあ (元日

待されていたという。

これが江戸における阿蘭陀正月の嚆矢となった。

る。 記念すべき第一回 ヒポクラテスの肖像が描かれた軸が飾られていた。 で知られ、出 大きな机にはワイングラス、フォーク、 席者 一の江戸 による寄せ書きがされてお 阿蘭陀正 月は津藩 の市川岳山が描く「芝蘭堂新元会図 ナイフなどが置かれ、 り、 当 日 の 楽しげな様子が 部屋中央には 十分伺え

どが 出席者は他に玄沢の師である杉田玄白や、 り医学の発展を期し、 無論ヒポクラテスはギリシャ 7 た。 尊敬したもので、 の医聖 であり、 蘭学者たちの面目 玄沢の弟子の宇田川玄随、 当時の蘭 方医 が座 がよく著されている。 石に掲 稲村三伯な げ医道を守

问 |預 一究が次第に盛んとなり、 てい 陀正月の背景には、 たことが ある。 八代将軍徳川吉宗による洋書輸入の一 この頃には蘭癖と称されたオランダ文化の愛好家が増 部解禁以降、 蘭

自らの学問の隆盛を願って、 を受け、 蘭 癖 らの 日本 舶 来 の伝 趣味に加え、 統的正月行事に把われることなく、 新 最新情報の交換を行う集まりとして、以後 しい学問である蘭学が一定の市民権を得ていたこと 蘭学者たちが親睦を深 も毎年行 め

われるようになっていった。

そしてこの賀宴は以後慣例となり玄沢の子・大槻磐里が没する天保八年(一八三 七年)まで計四十四回開かれた。 無論こうしたことは松平定信が失脚したからこそ実現できたことであったろう。

さて、寛政六年もすでに師走に入ったが、松之助が元服し、名を藤文と改め一人 前の大人として再出発したことは母親のお文との日常にも大きな変化をもたらし

って呼ぶのはどうにもね、歯が浮いてしまいそうでさ。 「松之助…いや、藤文が出世したのは嬉しいけどさ、あたしに向かって『母上』

いままでどおり『かあちゃん』でいいよと言ったら、静香先生にそれは駄目だと

いわれたらしいのよ。

なんだかあの子の顔を見るのが最近眩しくてさ…。

この前なんか、 お輝がさ『姉上』って呼ばれたらしくて恥ずかしいと顔を真っ赤

にして飛んできたよ」

お文が井戸端で土屋長四郎の妻お染めや長坂角之新の妻淑子に自慢とも困惑とも

思える話しをして笑われた。

「とはいえお文さん。若様の養育係となられた二本差しの男子が『かあちゃん』

ではやはりまずいよ」

お染に言われてお文はペロッと舌を出した。

そこへ、

「みなさま、お茶が入りましたので一息いれられませぬ

と久世仙之助の妻美保が声をかけた。

「ああ、そうですね。それでは一休みさせていただこうかね」

お文たちが美保の屋敷の縁側に向かうとそこにはすでに秋子と奈美も座してい

た

そしてささやかな京菓子と共に女たちの大切な交流のひとときが始まった。

そういえば男たちがそれぞれの役目に一生懸命であると同様、女たちにも日々欠

かせない役割が多々あった。

例えば屋敷の料理を一手に引き受けているのは秋子であったが、 あったにせよ共に七十九歳と高齢だった。したがって出来ることなら若い人に引 奈美の手伝い

き継 いでもらいたいと常々考えていたが、こればかりは誰でもが秋子と同じよう

な料理をつくれるとは限らないので困っていた。

そこにきて五人の家臣団の中の二人の女房、久世仙之助の妻美保と長坂角之新の 妻淑子は武家 の娘であり、 夫が浪人するまではそれなりの料理の経験もあったと

聞き秋子は驚喜した。

早速藤九郎やお蘭の承諾を受け、 美保と淑子に屋敷の料理のあれこれを伝授すべ

く時間を取るようになった。

なにしろ食事は日々三度あるだけでなく、時に国主や将軍といった人物も来訪す けなければならないことは多義に渡った。 る屋敷であったから料理の味付けや盛り方は勿論、 食材の選び方などなど身に着

ところでおたみはこの時診療所で井之上新界、吉太郎の前に座していた。

「おたみさん。この義歯の出来は良い。

よくも短期間で要領を覚えていただけましたな。

新界がおたみが削り出した黄楊材を眺めて声を上げた。 どうだ吉太郎、 このまま微調整すれば実際に使えそうだな」

「確かに。おたみさん、たいしたものです」

圏科と眼科を主に診ている吉太郎も破顔した。

「ありがとうございます。 お役に立てれば嬉しいです」

おたみも笑顔になった。

った。 らない人手だったが今ひとつ己の役割に不安があったので頼られることが嬉しか とうの昔に終わっていた。しかしその後もお文を手伝い下働きとしてなくてはな おたみはもともと松之助あらため藤文の乳母として雇 わ れたが、 無論その 役割

おたみは子供の頃から竹細工を手伝わされていたとかで刃物の扱いに慣れてい ん」と苦にしていない様子だった。 し、手が荒れるといったことも「百姓の女ですから気になるはずもありゃしませ た

ば少しずつ義歯の注文を再開しても良いのではないかな」 「ではな、吉太郎。もうひとつふたつおたみさんに試してもらい、 問題がなけれ

井之上新界が言うと、

と吉太郎も嬉しそうだった。 「はい。いくつかお願いしてみますのでまた肝煎りにご判断いただきます」

- 116 / 201 -

り |||向 は **笙船** 方だっ 般の 診療 が h 肝 煎 義 たか 所 歯 の運営方針 作り職 りだった時代から正当な代金を請求することにしていたしその金額 らそれは当然かかる費用は屋敷 人たちより高 は 相変わらず診療代や薬代を払え 価だった。 の持出だった。 ない 者 しかし義 から は 歯だけは 取 5 な

とは が広まり分限者や武家屋敷などから注文が相次いだが、主な職人として義歯 は念のために申しておく」 「ただな、 をしてい いえ精度 吉太郎。 た留吉が亡くなってからほとんど注文を受けてい がまったく違い、 おたみさんの仕事をむやみに急がしてはならぬぞ。 向島診療所の義歯は本当に使い物になるとの評 な か つ た 0 であ それだけ の細 判

費増大には神経を使わざるを得なかった。 新界もこれ てきた新界だが、 り一人の医者として、 で診 療所の収入が増える 己が診療所の肝煎りとなって最高責任者となれば、 金が払えない者たちへも分け隔 であろうことを期待 l て無 て機嫌を良くした。 ζ) 接 し方を心が 診療所の経

新 担を少し軽くした気分だった。 界は 義歯つくり再開が診療所のよき収入源となることを知っていたので心 の負

新界が診療所を出て母屋の居間に入るとすでにそこには藤九郎が刀の手入れをし

てした

新界が軽く頭を下げて藤九郎の前に座すと、藤九郎は笑顔で頷いた。 「藤九郎さま。 お話しがあるのですがお聞きいただけますかな」

ちょうど長四郎の妻お染が二人のためにと茶を運んできた。

「これはお染めさん、ありがとう」

藤九郎は刀を鞘に収めながら言いつつ、茶に手を伸ばすと新界も早速熱めの茶を

茶器を置いた新界は、

啜った。

「藤九郎さま。 診療所の肝煎りを息子新一郎に継がせたいのですがお許しいただ

けましょうか」

と言い切った。

顔を向けた藤九郎は、

「ほう…。なにかございましたかな」

と問いただすと新界は、

「幸いわたしは七十八になっても元気に過ごしておりますが、 昔のように一日中

診療所に詰めているのはさすがに辛くなりました。

若い者へ譲り、一層の励みにしてもらいたいと思いましてな…」 なりましたし、 それに新一郎や吉太郎も御蔭を持ちましてご承知のように立派な一人前 お輝も女医者として良い仕事をしております。そろそろ肝煎りも の蘭医と

「それに先ほど吉太郎と話しをしてきましたが、おたみさんが手がけた義歯作

り、どうやらものになりそうです。

後いくつか大切な技を覚えてもらえば診療所の収入としてまとまった額になろう かと思います。

えました」 きたらこれまで時間が取れず読めなかった蘭書などに目を通して過ごせたらと考 私も体が動く内はなにかありましたら手伝うことは吝かではございませぬが、で

新界は淡々と思うがままに話した。

しぱし茶器に目を落とした藤九郎は顔を上げ、

「先生のご決断とご判断は尊重しなければなりませぬ。

い間、この向島診療所のためにお働きくださったのじゃ。そろそろ息抜きをし

ていただくのも宜しかろうと思います。

俺も先生に命を助けていただいた一人、あらためてこれまでのお務め、ご苦労様

でありました。そしてありがとうございました」

当主の藤九郎が新界に頭を下げ、

「先生。肝煎りをお譲りになる時期じゃが承知のようにすでに師走。 新玉 一の年に

なったら早々時期を見て皆で慰労の会でも開こうではないか。

いかが…」

というと新界が神妙な面持ちで、

と平伏した。

「有り難き幸せ」

寛政七年(一七九五)も新玉の年を迎え、正月気分がやっと抜けてきた一月十五 日、藤九郎は静香、新界そして佐吉と共に茶室にいた。

年の抱負や屋敷の運営にとっての問題点などについて思いを一緒にしておきたか 藤九郎にとって夏穂亡き後、静香と新界、佐吉は頼りになる重臣たちであり、今 ったからだ。

張の近江屋さんと井筒屋さんから為替が届いておると相模屋清右衛門さまよりお 「藤九郎さま。すでに道之助さんからご報告があったと思いますが、新年早々尾

知らせをいただいたとのこと。

僭越ですが、当該金額と越後屋、相模屋さんらに運用をお願いしている額と合わ せますとお屋敷の運用にまったく問題はなく執着でございます」

静 香が茶器を藤九郎 の前に置きながら呟くと、かるく頭を下げ作法通りに薄茶を

楽しんだ藤九郎が、

「然様。 俺にはまだ理屈の上でしか分かっていないこともあるが、 有り難 ずり事

よ。

承知のように去年は新たに五人の家臣が増え、うち二人は女房持ちだし大食漢も おるから些か心配しておったが…」

と言うと井之上新界も、

ります」 が日々嬉々として患者に接しておりますし、持出額も一頃よりは少なくなってお 「藤九郎さま。診療所の方も今のところは特に問題はございませぬ。若い者たち

と報告した。

となっていま 「医療については新界先生にすべてお任せいたすが、 すかな。 義歯のことはその後いかが

おたみさんが良き腕を持っていると昨年末にお聞きましたがな」

藤九郎の問いに、

「は ; () 義歯 の依頼は当然ですが続いておりますし、診療所としても義歯だけは

をと試行錯誤してきました。そして意外と申しては叱られますがおたみさんが大 無料では作っておりませんのでいわば稼ぎ頭。 なんとかして以前 に 匹敵するも

変器用なことが分かりました。

道具の使い方と要領がわかればもしかしたら女子の方が神経が細やかで義歯作 n

に向いているのかも知れませぬ。

また時に申し訳なきことに静香さまのお手を煩わしているときもあります」

新界が応じていたそのとき、佐吉が躙り口からするりと姿を消した…。

「誰か屋敷に来たようじゃな」

藤九郎は座したまま呟いたが、しばらくすると佐吉が壮年の武家を連れ躙り口 か

「御館さま。

ら声をかけた。

ご老中首座、松平信明さまがお目にかかりたいと参られましてございます」

久世仙之助の影響もあって第三者がいる際には藤九郎を「御館さま」と呼ぶよう

になっていた。藤九郎も「殿」よりはましかと笑いながら容認していたのだっ

た

茶室で静香、新界と顔を見合わせた藤九郎は

「狭い場所じゃがお入りいただくように」

と命じた。

早速躙り口から入って来た男は藤九郎に頭を下げ、

「急なことでご迷惑と存ずるが一大事故お許し願いたく…。

それがし老中を仰せつかっております松平信明でござる」

と自己紹介した。

松平信明は三河国吉田藩三代藩主であり松平定信が失脚した後に老中首座を勤

ていたが藤九郎とは登城した際、一度城中で挨拶を交わしていた。信明はまだ三

十二歳という若さだった。

静香が点てた薄茶を両手で囲みつつ喉に落とした信明は作法通りに器を置き、

「よきお手前、ありがとうござる」

と頭を下げた。

「最もお忙しいはずのお方がこのようなところに来られるとは、何ごとでござい

ましょうや」

藤九郎はそう切り出した。

「はい。ことがことだけにそこいらに公言できることではなく、 また秘密裏にお

力をお貸 しいただけるお方は他にございませんのでな。

上様 が藤九郎どのに相談されるようにとのお勧め。 何はともあれ話しを聞 いてい

ただけまいか」

松平信明は両手を膝に置き、再び頭を下げた。

「あなた様は松平定信さまにその才能を認められた知恵者と伺っておりますが、

そのあなた様が一大事だというからにはお聞きせざるを得ませぬな」

藤九郎は佐吉に目配せすると佐吉は躙り口から出て、話しを傍受する輩が (1 な ζ.

かどうかを監視し始めた。

「藤九郎どの…。 上様を、 上様のお命をお守りいただけまい

かっ

信明はいきなりそう口に出した。

「な、なんと…」

松平信明の説明によれば、以前より監視を続けていたとある集団 家斉の命を狙う計画が進んでいることを公儀御庭番たちが嗅ぎつけてきたとい 0 ひとつに将軍

「何者でございますか、そやつらは」

う。

藤九郎が問うと、

「それが今のところはっきりと分からないのでござる。

ただ…」

「ただ…」

「はい。それがしからは大変申し上げにくいのだが、あの松平定信さまが関係

ているという噂もございましてな」

苦しそうに絞り出すような声で松平信明が言った。なにしろ松平信明は定信 として幕政を主導してきたわけで、巷には「寛政の遺老」と揶揄する声もあっ 挙で幕閣に加わった一人であり、寛政五年に定信が老中を辞職すると、老中首座 の推

要するに世間では信明は松平定信の息がかかった一人として認知されていたの

「まさか、定信さまが上様のお命を縮めようとなさるとは…。 意趣返しですか

な

ですが、放っておくわけにはまいりませぬ」 「はい。 まさかとはそれがしも考えます。まだそうした混乱した情報の段階なの

松平信明が唇を噛 んだ。

しばし沈思した藤九郎は、

「お話しは分かりましたが、 それがしに何をしろと申されますかな」

と問うた。

松平信明は藤九郎、 新界そして静香の順に視線を移した後

「実は三月五日に小金原御鹿狩が予定されておるのですが、どうやらそのときに「実は三月五日に小金原御鹿狩が予定されておるのですが、どうやらそのときに

事を起こそうとする気配があるらしいのです。

やはり城中にてことを起こすのは難しいからとその鷹狩りの最中を狙うといった

計画のようなのです。

しかし何としても上様のお命を守らねばなりませぬ・・・」

と答えた。

小金原御鹿狩とは、 江戸時代に徳川将軍が現在 の千葉県松戸市の小金牧の中野牧

を中心として、鹿・猪等を狩った大規模な鷹狩りのことである。

我が国の鷹狩りの歴史は古く、 から鷹が輸入され、 西暦三五五年というから、 、仁徳天皇の時代に大陸

朝廷を中心に公家の遊びとして親しまれたという。

する草食動物、 事演習と将軍の示 事 は江 馬を襲う野犬の駆除等の目的もあった。 一戸時代に盛んとなり、 威、 そして農作物に害をおよぼ 将軍 の娯楽とい つた意味 し小金牧の馬と餌が競合 味合 いだけ で は

受け、 まつわる目黒のさんまの話もこの頃の話しとされるが、話の主は八代将軍吉宗と 狩りの際に目黒不動に立ち寄ったのが縁で、元和元年の火災で焼失した本堂を再 また領地視察や庶民 いう説もあ 二代将軍家光は近郊へ遊猟に出ることが多く、 Ę 仏像なども寄進したといわれている。 江戸近郊の最も有名な参詣行楽地として栄えていった。 る。 の暮らしを見分するという大義名分もあったとされ、 以来、 寛永元年 (一六二四年)、 目黒不動は幕府 さらに爺ヶ茶屋に の厚い保護を 秋の 例えば 鷹

話しを松平信明の依頼に戻そう…。

「そういった輩は御庭番らで阻止できませんのか」

井之上新界が初めて口を挟んだ。

の威信 も狩場で上様 無論 できうる限 ・面目が丸つぶれです。 が襲われる…襲われたというそのことがあからさまになっては幕府 りの策を弄するつもりですが、 あってはならぬことなのです。 ひとつ重大な事は防 げるとし

とは いえ一旦決まった小金原御鹿狩を中止することはできませぬ。

したがって狩場までの警護は御場御用係を中心に我らで物々しくやるにしても、 一旦狩場に入った後は諸侯の目もあり、 警護も目立たぬようにやらねばなりませ

松平信明が言うと、

「それを我らにやれと申されますか」

と藤九郎が返した。

「上様の願いでございますので…」

「願い…でございますか。命ではございませぬので」

「はつ。上様いわく『藤九郎らは幕府の禄を食んではおらぬ故命じることはでき

ぬ。ただただ願ってくれ』とのことでございました」

松平信明が藤九郎を凝視して答えると藤九郎の目が潤んできた。

「佐吉。異常がなければ入ってくれ」

藤九郎が声を上げるとすぐに躙り口から佐吉が戻ってきた。

「では松平信明さま。詳しくお話しをお聞かせくだされ」

お、 お引き受け いただけますか。 かたじけ ない…」

頭を下げた松平信明が懐から数枚の絵図のような物を畳みに広げて一同を見回 一枚は狩場の地図、 後の数枚は小金原御鹿狩の様子を錦絵にしたものだっ

うですが、規模や雰囲気がよう出ているので持参いたしました」 「この絵は家斉さまのお狩りではなく八代将軍吉宗さまの際に描 かせたものだそ

松平信明はそう言いながら最初に地図を広げた。

密談はそれから一時ほど続いた後に松平信明は、

「それがしがこちらに参ったこと自体も他言無用に願います」

そして翌日の午前中も藤九郎は茶室に籠もり、 と言い残し、 藤九 、郎と頷き合って待っていた無紋の乗物に体を滑 沈思し続けていたが午後になると り込ませた。

静香と佐吉そして久世仙之助をはじめとする五人の家臣たちを呼んだ。

「なにごとでございますか、御館さま」

これまでなかったことだけに仙之助は思わず口にした。

「うむ。順に話すが、この茶室は密談に最適だがこう人が集まると狭いな…」

藤九郎が呟くと静香が、

「藤九郎さま。 釈迦に説法なれど広々とした茶室などまずございませぬ」

と笑うと座が和んだ。

「まず申しておくが、これからの話し、決して他言無用

よいな」

「ははつ」

五人が頭を下げた。

藤九郎は老中首座松平信明から、将軍家斉が狩りをする際の陰護衛を依頼された

と話し、ひととおりのことを説明した。

「で、御館さまはお引き受けなされましたので」

仙之助が問うた。 「うむ」

「それであれば我ら家臣が是非を申し上げることはございませぬが、いくつか分

からぬことがございます」

「遠慮無く申してみよ」

藤九郎が言うと仙之助は、

「まず大変難しい命だと思いますが忍びを含め、 上様のご家来衆には剛 の者が

多々おられるはず。 なぜ御館さまに願われたのでしょうかな」

と首を傾げた。

他の四人も頷いている。

「もっともな問 いよ。 俺も同じ事を松平信明さまに問うた

一番の理由は上様暗殺の計画があること自体、幕閣はともかく城中はもとより諸

侯らに知られてはならぬということよ。

そういう輩が存在するという事実は上様の意志に反する者達がいることを意味す

る。そのこと自体を表沙汰にしたくないということらしいな」

藤九郎が説明すると、

「随分と身勝手な理屈でございますな」

と天野三十郎が苦虫を噛みつぶしたような声を上げた。

「うむ。確かに三十郎の申すとおりじゃ。

目だけでも万全の体制作りがなっていることを示し続けなければならぬのだろう しかし、このことこそ徳川政権が一枚岩ではないひとつの証 しか ₽ 知 n ぬ。 見た

綻びひとつ見せてはならぬのだ」

「なるほど…」

と仙之助が再び、

「上様はこのことをご承知なのでしょうか」

と聞いた。

さまに申されたそうじゃ。

「ご承知だ。その上で我らに命じるのではなく暗殺阻止を願ってくれと松平信明

となれば、お受けせねばならぬだろう…」

藤九郎はあらためて一同を見直し、

それだけに難しい命ではあるがやり遂げねばならぬ。 「よいか。この儀はお主らと俺が一丸となって事に当たる最初の試練と思え。

よいな」

と言い切った。

「承知!」

「はい」

の声が続いた後に仙之助が、

「なにか策を考えなければなりませぬな」

政

七年三月五日

来

と呟くと、

藤九郎は自身を鼓舞するように頷きながら言 「それをこれからお主らと打ち合わせた 77 い切っ た。

そ 願 の二日後、 を松平信明に伝えるため、 佐吉 は久しぶりに元公儀隠密ではなく、 密かに登城した。 藤九 郎 の意と数々の手筈

0

のそのが

れ、 綾藺笠を・ 子の 刻に 小 脇 江戸城を出 に抱え、 射籠で て両国 手と行騰とい 橋 か ら舟を使 つ た狩り 17 り姿の将 そして水 軍家斉 戸橋 から自 は 大 勢 馬に の伴 跨が を 連 ŋ

卯の刻半に松戸で休息を取ってから辰 0 刻半に 狩場に着 61 た。

繰 ŋ 小金原御鹿狩は 徳川 将 軍が 現在 の千葉県松戸市 0 小金牧 の中 剪 牧を

な

鹿 • 猪等を狩 った大規模な鷹狩 りであ る。 また狩 は周 到 に 準備 重

武 蔵からも獲物を追 多数 の勢子を用 7 い込んで行うという大規模なもの 数日に渡って小金牧 のあった下総 であ 国 つ 0 た。 ほ か、 上 総、 常 陸

なお勢子とは、 狩猟を行う時に、 山野の 野生動物を追 い出したり、 射手の 、る方

向に追い込んだりする役割の人を指す。 そして勢子の人数が数百人を超えること

もしばしばあった。

獲物は 触書が出され 中野牧・下野牧の馬は下野牧東 武 |蔵・上総・下総 たほどで、 狩の準備 ・常陸の四 の六方野境田谷に土手を築いて集めて移すよう御 0 周到さが 国五郡から集められた。さらに狩の前 伺える。 年に は

さて、 られた御立場と呼ばれる場所に落ち着い 家斉は 五香公園近くにそこだけまるで城壁のように数十メートルも高 た。 く作

背面 は青と白の段幕で隠され、 周囲は厳重な警戒がなされてい たの は言うまでも

そし 題 7 は大勢の勢子と馬に乗った狩り手たちが多々交差する中でどのような警護が そ 0 御 立場 には 将 軍 \dot{O} ために食事と茶 の湯 0 ため の準備もなされ てい た。

できるか…であった。

が、広大な狩場、 無論この狩りに参加できるのは選ばれた諸侯たちだったし厳しい検問もあっ をせずに保護するのは至難の それも鷹を飛ばし獲物を追って馬で疾走する家斉を狩りの わざだった。 邪 た

さらに将軍の乗る飾り馬は白馬であり、 目でわかり狙う者にとっては一 目瞭

ながら槍や弓あるいは場合によっては鉄砲といった殺傷能力のある武器があるわ けで、悪意をもって近づかれては非常に危険だし、 そして回 に勢子あるいは狩り手に扮するし りに群 n る警護 の者はもとより、 か な ; ; 騎乗 の狩り手たちの 守る側としても目立たぬよう 手には当然 のこと

ということで、 危ないと誰しもが考える。 暗殺者が家斉を狙うとすれば狩りに夢中になっているときが一

御立場から見物の が あるが 旦狩 7場に出てしまえば警護が段違 場合や休息時 には 周 りに 重臣 いに難しいのだ。 たちを始 めとして警護も厳 61

準備 ができたからと段幕の奥から早速諸侯たちを先導する形で綾藺笠を深々と被ができたからと段幕の奥から早速諸侯たちを先導する形で綾藺笠を深々と被

り、 射籠手と行騰姿の家斉が馬に飛び乗り狩場中央に駆けた。

が跳 鷹匠 が放った鷹が青空に飛鳥し、 ね回り逃げ惑うのを騎乗の射手たちが囲むように追い込んでいく…。 勢子たちが追い込んだ鹿や猪、 あ るいは

家斉は見事な鹿を逐い、次第に御立場から離れていった。

木陰に隠れた鹿を追い詰め、 抱えていた槍を突き立てようとしたとき、

「お命頂 《戴!」

と声が掛かり、 狩り手に化けていた馬に乗った四人が駆け寄り槍が突き出され

刹那、

家斉が地 家斉は馬から飛び上がったと思うと襲った馬上の騎手二人の胸に矢が に降り立ちながら振るった槍で一人の臑が切り落とされた。 減減さ

さらに家斉は すかさず落馬した三人に無言で止めの突きを入れた。

「ぎゃああ」

「うわあ

あ

ま逃げ出したが、 の悲鳴も狩場の奥まで進んでいたため他には聞こえず残りの一人は馬に乗ったま すかさず投げられた槍が見事に男の背から胸を通貫し馬上から

転げ落ちた。

「これまでか、金之助」

斉だと家臣らも思っていた武士は神保金之助であった…。 馬上の家斉と思われた男に声をかけたのはなんと狩り姿の松平藤九郎であり、 家

「はつ。そのようでございます。

ようです」

前方の草むらでは長四郎どのと角之新どのが待ち構えていた数人を切り捨てたも

手綱を見事に操りながら家斉の影武者となっていた神保金之助は背を伸ばし前方

を見据えながら言った。

「仙之助。皆大事ないか」

藤九郎が叫ぶと、

「はっ。逃げようとした最後の一人を三十郎どのが槍で仕留めましたのでこれま

でかと…」

久世仙之助がほっとした声で言い切った。

「急ぎ屍をまとめて隠せ」

藤九郎が命じると仙之助らは手早く屍を地中に埋め、 両手を合わせた後に目印の

小枝を刺した。後で掘りかえすためである。

「では後は手筈通りにな…」

めでもあった。 獲物として兎を持参したのは成果を示すだけでなく戦いの血の臭いを紛らわすた じめ用意しておいた兎を二匹ぶら下げ御立場に戻るため 藤九郎はそう言い放ち、再び馬上にある家斉に扮した神保金之助らと共にあらか に 馬の腹を軽く蹴 った。

金之助扮する家斉 は御立場に上る前 に綾藺笠を深く被つ たまま無言で段幕 0 中に

消えたがしばらくして再び家斉が立ち現れ、

「獲物が兎二匹では納得いかぬ故、今一度鷹を放て」

と命じて再び馬上

の人となっ

た。

無論 じく馬に跨がったのは藤九郎と五人の家臣たちであった。 本物の家斉としてはこれが本日最初の鷹狩りであった。 ただし警護として同

藤 他 の警護 陣が 九郎らの読 殲 の者たちに混じり藤九郎らも同行したのだった。 滅された みでは将軍を襲う者たちがそうそう居るとは思えなか ζ.) ま、 同じように襲われることはなかろうと考えたが念のため った。 うた

局その後家斉自身は鹿五頭を仕留め、 機嫌良く御立場に戻り重臣たちの勧 め

一休みの一興として茶を所望することにした。

「余は些か喉が渇いたぞ」

そう言いながら家斉が主客の座に座り、 向か い合った宗匠頭巾を被り、 帯に袱紗

をかけた亭主に会釈を送った刹那異変が起こった。

瞬間亭主は家斉を庇うように飛びながら背後に向け腕を振った・・・。

「ぎゃああああ」

悲鳴が段幕の裏から聞こえ、同じく飛び出した藤九郎が一人の忍びらしき男の襟

体で脇差しに手を掛けたその手が震えている者もいた。 その場にいた 首を引きつつ脇差しで止めを刺したが、 のは松平信明ら老中など一部の重臣たちだけであったが、皆驚愕の 男の額と首には鉄片が刺さっていた。

ただし家斉自身は何ごともなかったかのように座り直し、一服の茶を美味そうに

喉に落とした。

その後松平信明は、

「ご一同…何ごともなかった…。よいな!」

と老中や重臣たちに強く念を押した。

なんと、 宗匠 頭 巾を被った亭主は 男装 した静香であ Ď, その着衣 の前 に は 静

着用していた鎖帷子に阻まれた手裏剣が落ちていた。

どうやら暗殺者は御立場の背後を密かによじ登り、家斉に向けて必殺の手裏剣を 投げたに違いなかった。 無論静香が盾にならなければ家斉の命は無か った違い

記録によれば家斉は亥の刻に江戸城内に帰還したとされるが、 な膳を囲んだ。 数騎を引き連 れ 短 い時間ではあっ たも 0 の向島の藤九郎 の屋 敷 帰り道に騎馬二十 へ立ち寄り、 簡単

それは藤九郎への礼のためだったが、家斉が膳を囲んでいる間、 後始末などに ついて松平信明と打ち合わせをしてい た。 藤九郎は今回の

半時ほどの後家斉は、

まは何 藤九郎、 も礼 世話になった。 が出 来 ぬが、 後でな…なんらか形を示そうぞ」 おかげで無事城へ戻ることが出来るわ。

と機嫌良く馬上の人となった。

=

家斉の姿が闇に消えるとお蘭が春幸の手を引き、 藤九郎 の胸に飛び込んでい

「ご無事でなによりでございました」

涙声のお蘭を不思議そうに見上げる春幸を抱き上げた藤九郎は、

で早速居間で皆と膳を囲もうではないか」 「心配を掛けたが皆の働きにより無事に命を遂行することができた。 腹も減った

と声を上げた。

秋子ら女衆が準備をしていた膳が居間にずらりと並べられ、いつもより遅くなっ たものの家族と家臣ら全員の顔が揃った。

「僭越ながら屋敷を代表してご無事でご帰還されたこと。ならびにお役目を達せ

井之上新界が盃と共に声を上げた。

られた由、

誠におめでとうございます」

「おめでとうござる」

「よかったねえ」

と様々な声が上がる中、 久世仙之助が求めに応じて今日の経緯を簡単に話 じ始め

てレナ

漏らしてはならぬとの御館さまの命です。よろしいな」 「…ただし皆の衆。この話し、 御屋敷内のみの話しでござる。 御屋敷外には 切

仙之助が念を入れた。

「神保さまあ。公方さまになられた気分はいかがだったか

お文が少しの酒で顔を赤くして問うと、

「いやはや、それがしの気持ち、なかなか言葉にして説明できぬは、お文さん。

なにしろ緊張の連続ですからな」

と頭を掻きながら神保金之助が答えた。

女房となったお染めが目を丸くして見てい お文が当主は勿論、家臣たちに対して遠慮の無い物言いをするのを土屋長四郎 る。

0

えもしなかったからだが、そのお染めの驚いた表情を横目で楽しそうに眺めなが 何故ならお染自身ももとは百姓の娘であったから、 武家に対等に物をいうなど考

ら藤九郎が、

るとな、一部の重臣の方々はすでにこの策を承知だったが、他の者は気がつかな そこの策を思いついたのだが、畏れ多くも上様の狩り衣裳を着て綾藺笠を深く被 かったようじゃ」 「実はな、 金之助は年格好が上様と似ておるのだ。そして馬に 慣れ てお るか

と説明した。

「それに、そもそも上様のお顔をしげしげとご覧になったことのある者など限ら

仙之助も上機嫌だ。

れておりますからな」

といいますな」 も上様のおわす前には簾が半身垂れて着座しておられるのでそのお顔は見えない 「然様。これまた聞き及んだだけですが、通常白書院で上様に謁見できたとして

平身低頭するだけと聞きました」 「いや、それ以前に例え国主であっても上様を拝し見ることはできず、ただただ

例であることを家臣たちも肌で理解し始めていた。 ように面前で将軍と直に顔を会わせるなどいかに非公式の場とは言え異例中の異 長坂角之新と天野三十郎も聞きかじりの知識を披露したが、事実藤九郎の屋敷

れ藤九郎の考えた策は家斉の影武者を作り敵を欺くと同時に万一 影武者が

ばれても襲撃を分散できると考えた。

問題はいかに影武者を家斉らしく見せるかにあったが、年格好が似ている金之助 にその役目を命じたのだった。そして衣裳も馬も同じにして本物の家臣・護衛団

をつけることの許可を取ったのだった。

そうした詳細を知る者は家斉本人はもとよりだが、老中と御場御用係の責任者

松下八郎勝臣だけだった。

「それにしても藤九郎さま」

静香が、

「敵はいったい何者だったのでしょうか」

と問うた。 「それよ…。

それを調べるのは我らの役目では無 になろうが、そもそも身元が知れるものなど身に着けてはおらんだろうな。 いがな、 お偉方が屍を後で丹念に調べること

それにしても静香どのが受けた手裏剣はどうやら忍び道具のようじゃな」 「はい。 しかし、 伊賀や甲賀と特定できる武器ではございませなんだ…」

「とはいえあの御立場を警備陣に知られず登り切るなど忍びで無ければできぬ技

であろう。勢子にでも化けて近づいたのであろうか」

「さようですな。しかし警備陣、 御場御用係たちは不始末を咎められるでしょう

そんな話しが続いたが最後に、

「今回のようなお役目、二度とないことを祈りたいものよ。

静香どの、そして久世仙之助、土屋長四郎、天野三十郎、神保金之助、 長坂角之

新、ご苦労であった」

藤九郎がしみじみと呟いた。

膳が片付けられ、それぞれが藤九郎に頭を下げ、 己の部屋へと向かったとき、 静

香が藤九郎に声をかけた。

「うむ」

「藤九郎さま。井之上先生と佐吉さんを交えて少しお話しがございます」

静香の物言いに頷きながら藤九郎は再び居間に座した。 「話しとは先ほどの続きかな」

「はい」

静香が答えながら佐吉に視線を送ると、

「藤九郎さま。ひとつ懸念がございます」

佐吉が言い置いて話しを始めた。

幸い藤九郎ら の働きにより家斉暗殺計画は食い止められたが、 仕掛けた者にとっ

ては痛恨の極みに違いない。

を突き止めるのではございませぬか」 「ことは秘密裏に行われたとはいえ、 上様暗殺計画の首謀者は我らが働いたこと

佐吉はそう言い切った。

「なるほど。突き止めたとあれば遺恨返しがあるやも知れないと言われるか」

「御意」

「うーむ。となれば我らの戦いは未だ終わっておらぬか…」

藤九郎は三人と頷きあって窓の外を眺めると、見事な三日月が青い光を放ってい

たが、ふと思い出し、

に肝煎りをお譲りになる祝いをいたしましょうぞ」 「井之上先生。ご承知のような仕儀で延び延びになってしまいましたが来月早々

と破顔した。

か し将 軍家斉が 小金原御 鹿狩 から戻って暫くの後、 江戸 0 虰 に感冒 が 流 行

向島診療所も大忙しとなった。

そんなわけで新界の肝煎り退任および息子新界の就任 くなり、 口さがな 若葉が目立つようになった五月の中日、 い人たちは将軍が狩りで殺生をしたからだと「御猪狩風」と命名した。 屋敷 の大広間にお の披露は 予定 いて行 よりか なり遅 わ

高清ら分限者 宴席には杉田 った異色の客 の姿もあった。 もいたが、 玄白といっ た新界の友人である蘭方医や蘭学者あ 吉原会所の四郎兵衛や浅草弾左衛門、 るい 山田浅右衛門とい は越ば 後屋三井

に行き来があった訳だが、四郎兵衛 りしていたことは言うまでもな 無論松平春貞 の時代にこれらの人々と知り合い、 4 は勿論皆春貞が付き合った者たちから代替わ 助 け合った縁 から現在 ま でも 時

至 例えば山 っては役目 田浅 に就就 右衛門は五代目吉睦 いてからまだ二年ほどであり若干十五歳であった。 でありこのとき二十八歳、 九代弾左 衛門集林

者 藤 九郎は当主襲名した際に新界に導か たちにも挨拶回りをしたことで縁が繋がっていたのである。 れ、 これら幕府の影とも見られていた有力

祝 いの席が が一区切りついたとき、 歳が近いからか藤文と弾左衛門集林が親しく笑

い合っているのが印象的だった。

「それがしは家督を継いでからまた二年ほど。弾左衛門とか集林と呼ばれてもピ

ンときませんでな。

宜しければ浅之助と呼んで下され」

弾左衛門が言うと、

ぜぬことだらけですが、それでもそのお力の及ぶ範囲がいかに広いかは聞 「とんでもございません。弾左衛門さまのお役目についてはそれが し不勉強故 心かされ

とはいえそれがしも今年元服し名を変えたばかり。 お気持ちはようわかります」

と藤文は笑みを返した。

ております。

方、 杉田玄白は少しの酒で顔を赤くしながらも山田浅右衛門吉睦と膝を交えて

いた。

玄白が徳利を吉睦に向けながら問うた。 「浅右衛門さまはお生まれが奥州湯長谷藩だと漏れ伺いましたが…」

「これは恐れ入ります。

それがしは山田家に養子に入りましてな…。

そういえば当家初代当主さまの松平春貞様の御名は幼少のころから母に聞かされ

ておりましてな…」

吉睦は呟くと、

「それは面妖な…」

と玄白が聞き返すと吉睦は悪戯っぽい顔をしながら、

初代肝煎だった小川笙船さまに俳句を教えていただいたことなどを楽しそうに話 いことがよほど嬉しかったのか、こちらの御屋敷のことや、そう…小石川養生所 していたと聞きましてございます」 った時代がありましてな、酒が入ると三代目は松平春貞さまと親しくしていただ 「実は、それがしの母は春貞様と親しく交流をいただきました三代目吉継 の女だ

と説明した。

「それはまた奇異なご縁でございますな。

縁といえば、わたしも奥州には些か縁ができましてな。

ざいまして実際にお目にかかったことはございませんが…。 一ノ関藩医の建部清庵というお方と知り合い、といっても文のやり取りだけでご

それ は医学に関する問答ですが、この度その往復書簡を弟子たちが出版してくれ

ることになりましてな。

秋にも刊本されるようで楽しみにしております」

玄白 の顔が赤いのは酒のせいだけではないようだったが、 その往復書簡 は 和 蘭

醫事問答」二巻としてこの年の秋に出版された。

ちなみに杉田玄白が四十年も経て回顧した「蘭学事始」に比べると、本書の方が よく現れていて「解体新書」 時代的に 「解体新書」の進行状態が生々しく記録されており、 の翻訳 ・刊行という偉業を知る上で価値ある医学文 玄白自身の心境も

献として高く評価されている。

なお玄白と清庵の交流は医学面のみならず、玄白を尊敬する清庵は子の勤を玄白 の養子としている。

勤は後に杉田伯元と名乗り、玄白の偉業を継いだ。

また、 総代三浦屋惣左ヱ門そして遠巻きに五人の家臣らが手酌で酒を飲んでいた。 人活太郎、米問屋宝屋の主人吉右衛門といった商人と吉原会所の四郎兵衛、 大広間 静香、 秋子、奈美と共に三井高清、 の上座付近には井之上新界の回 相模屋清右衛門、 りに藤九郎は もとよりだが、 薬種問屋蓬莱屋 お 吉原 蘭

おたみ、 そして配膳も終えたと見えて入り口付近ではお文を中心とするように女房たちや お輝といった女衆が集まっていた。

たが、隠居された後はどうなさるおつもりで…」 「井之上先生は笙船先生のご意志を受け継ぎ医療一筋にここまでご活躍されまし

相模屋清右衛門が問うと、

がな」 時間が無くて読めなかった蘭書でもゆるりと読み始めようかと思っているのです 「そうですな。わたしには趣味といった粋なものは持ち合わせておりませんので

新界が応じると、

「それでは結局医学・医療から離れられないではありませんか」

と越後屋三井高清が笑った。

ょう。たまには気分転換…息抜きで大門を潜られてくださいませな。 「ご隠居されたのであれば僭越ながらご家族の方々もあれこれと申しませぬでし

歓迎いたしますぞ」

吉原会所の四郎兵衛が笑みを浮かべた。

「それはよろしいですな」

「羨ましい…」

男たちが喜ぶ顔を眺めながらお蘭は、

「藤九郎さまも先生の付き添いで北国に足を向けられたいのではございませぬ

カ

と口を挟んだので藤九郎が苦笑いし、

川笙船先生を訪ねて以来、お休みといえば亡くなられたおよし様とのご婚礼の後 「まあ、それがしはともかく先生は確か、 長崎からの帰りにこの向島診療所に小

に三日ほどご実家に戻られただけと伺っています。

と冗談を言うと薬種問屋蓬莱屋の主人活太郎が、まあまあ吉原に住み着いても罰は当たりますまい」

「それでは手前が竜宮城へのお伴をさせていただきましょうぞ」

と戯け三浦屋惣左ヱ門は、

それでは竜宮城の乙姫様方を待機させておきましょうかな」

と破顔した。

そのあと、

「そういえば、 近々義歯をお届けいただけると伺いましたが」

三浦屋惣左ヱ門が思い出したと口にした。

「はい。 微調整が必要かもしれませんのでお届けがてら確認させていただきま

) |-|-

担当の吉太郎が応じ、

「ただし私は診療所をあけられませんし微調整ができる者といえばおたみさんに

なると思います」

と言うと惣左ヱ門は相好を崩し、

「これでまた、好きなものが食べられ嬉しいですな」

盃を口にしながら吉太郎に頭を下げた。

ところで、新たに肝煎りに就任した当の新 たが、これからの重責を思ってなのか口数が少なかった。 一郎は吉太郎やお輝らと膳を囲んでい

41

し嫌かも知れ 「というわけでな…おたみさん。 、ぬが、 かも知れぬ。 承知のように義歯を三浦屋惣左ヱ門どのに納めるには最後 女のお前さんに大門を潜らせるのは気が進まぬ 0

微調整が必要

その微調整は 診療所で吉太郎が新一 私以 外はおたみさんしか出来ぬ 郎と視線を交わしながら遠慮がちに言った。 のだが、 頼めますかな…」

「なに、先生方。お気遣いには及びません。

な場所かは承知しておりますし、正直申しますと一度覗いてみたいとも思ってお あたしは死産だったけど子供を産んだ女ですしこの歳でもあります。 北国 **「**がどん

りました」

おたみがそう返すとお文が、

「そうだねえ。どんなとこなのか一度は見てみたいものだよねえ」

と真顔で呟いた。

無論吉原はそこで働く女たちにとっては苦界であったが、反面江戸のファッショ

ンリーダーでもあったのだ。

「そうか、それはありがたい。

とはいってもさすがにおたみさん一人で大門を潜らすのは忍びないし金もいただ

いてこなければならぬ。誰か一緒に行って貰おうか…」

吉太郎が言い終わる前に診療所の掃除を手伝っていた巨漢の天野三十郎が、 「せ、先生。是非それがしにおたみさんの用心棒を任せてくださらんか」

と顔を出した。

「天野さま。遊びに行かれるのではないんですよ。

行ったっきり戻ってこないなんてこまりますだ」

遠慮の無いお文が真顔で言うと三十郎は右手を顔柄の前で振りながら、 「お文さん、それはない。ここはそれがしがやっと巡り会った理想の城だ。

はない…というよりこれまで用心棒の給金は皆食い物に化けてしまったでな。 し昔な、島原の遊郭に連れて行ってもらったことはあるが吉原に足を向けたこと

で、一度覗いてみたいのじゃよ」

と正直に呟いた。

さ、しっかりとお働きよ。 「まあ、男はみな同じだね。それにおたみさんに万一のことがあったら困るから

先生方、いいよね…」

お文は新一郎と吉太郎の顔色をうかがいながら三十郎の大きな背中をドンと叩い

味ではあるが品の良い小袖姿だった。 とめて吉原へ向かった。ただしいつもの普段着ではなく秋子が見立ててくれた地 その三日後、おたみは仕上がった義歯と調整のための道具一式を風呂敷包みにま

一方の三十郎は、着流しに二本差し、そして月代や髭も綺麗に剃っていた。

「おたみさん。なんだか緊張しますな」

大門が見えてくると巨漢の三十郎はしきりに首を回したり、肩を上下させたりし

て落ち着かない様子だ。 「嫌ですよう、天野さま。天野さまは用心棒なのですからデンと強そうに堂々と

してくださらなけ ń

おたみの方が落ち着いていた。

も申されておったが、特に難しい事は 「そうだそうだ。それがしはおたみさんの用心棒で従者だったな。 ないとな。 まあ御館さま

間、付きっきりも無粋だから多少は飲み食いしても良いと…ほら五両包んでくだ それにな、おたみさん。おたみさんが三浦屋惣左ヱ門どのの義歯を調整している さった。

しかし、なんだろうな。 あの御屋敷というか御館さまもなんでこんなにも優しい

大門の上を渡る白い雲を眺めながら三十郎は呟 ついた。 のかのう」

「ほんとですね。あたしも乳母として御屋敷に雇われたんだけど、産み落とした

子が死産でさ、あたしは役立たずと言われて放り出されたの。

ちゃま…いや、藤文ちゃんの乳母として雇われたのよ。 このままなら首でも括るしかないと思ったときにお文さんに拾われて松之助ぼっ

当時のご当主は井之上新界先生でしたがお優しい方でさ、下働きのあたしにもき ちんとした口を利いてくださるし、これまで叱られたことなど一度もなかったね

え…」

おたみは懐かしそうに話したがすでに大門は目の前だった。

大門を出入りするのは男なら誰でも咎められは できるし事実吉原は遊女以外にも多くの女性が働いてい しないが女は違う。女も出入りが た。

を許されなかった。 所で切手 出るのを監視していた。 そうした一般の女性に化けて遊女たちが逃げ出さないようにと大門を潜った右 に四郎兵衛会所(吉原会所)と呼ばれる小屋があり、番人が常駐して女が (通行手形)を入手し、大門を出るときにそれを提示しなければ出るの 。したがって女の場合はあらかじめ引手茶屋や四郎 大門を 兵衛会 側

おたみは臆すること無く四郎兵衛会所へ立ち寄り番人に、

「向島診療所から参りました。 恐れ入りますが四郎兵衛様にお取り次ぎくださ

V

と頭を下げると後ろに付いてきた三十郎も続 ζ) て頭を下げた。

屋に通されるとそこにはすでに四郎兵衛がなにやら書き物をしていたようだが、 あらかじめ話しが通してあったのか、 早速中に入るように言われ、二人は奥の部

一人を破顔して迎えた。

部

とお聞きしておりますがお許しを」 「わざわざ申し訳ございませぬな。 本来ならこちらからお受け取りに伺うの

四郎兵衛がいつにもなく如才ない物言いをするので若い者達が怪訝な顔をしてい

た

案内された一室に四郎兵衛と入るとすでに若い遊女が一緒で酒も用意されてい り口で大小を預けた後、 していたが、 四半時後、 おたみは吉原一の大店三浦屋一階の内所で楼主三浦屋惣左ヱ門と相対 義歯 の微調整は半時ほどかかるということで、三十郎は三浦屋 四郎兵衛と共に二階で時間を潰すことになった。

「藤九郎さまらご家族にはお変わりございませぬかな」

四郎兵衛はそう口火を切った。

「はい。お陰様にて息災に過ごされております」

「それは上々。

天野さま。せっかくの機会、酒も召し上がってくだされ」

四郎兵衛の目配せで遊女が酌をするのを受け、三十郎は盃を空けた後、

「過分なお持てなし、恐縮でござるが今日はお たみの用心棒として同道 いたしま

したのでな、好きな酒ではございますがここまでにしておきます」

と頭を下げた。

またもし手持ち無沙汰であれば、この桜木と床入りしていただいても宜しゅうご 「律儀なお方でございますな。ではささやかですが料理でも口にしてくだされ

ざいますぞ」

四郎兵衛が表情を変えずにいうと三十郎は慌てて、

「い、いや。役目で伺い遊んで帰っては屋敷の門をくぐれませぬ。 お許しを」

と言いつつ、

「失礼、それがしは手水に…」

と席を立った。その慌てた三十郎の後ろ姿を眺めながら四郎兵衛と桜木は顔を見

合わせて微笑んだ。

二十郎が手水から戻ろうとしていたとき、正面から

「お助けくんなまし。無体な客に追われておりんす…」

何を思ったか、無言で女を軽々と抱えたまま空いていた隣の部屋に転げ込み、 と見るからに高い位の遊女と思える女が三十郎の胸に飛び込んできた。三十郎は 衝

立の向こうに女を抱くようにして布団を被った…。

直後に荒い足音と共に四十がらみの武家が怒り心頭の体で入って来て、

「高尾。逃げるでない。海東藩の面目にかけても今日こそは身請けして連れて帰

る

と怒鳴った。

刹那「無礼者!人の部屋に入るのに無断で何たる様だ」

二十郎は高尾と呼ばれた遊女を己の巨漢の下に置き、被っていた布団から顔を出

して怒鳴った。

「高尾は俺の女だ。無礼は許さん。

それにな、いま多忙中だ。事が済むまで待ってろ、 馬鹿者め

続けて怒鳴られた男は衝立を蹴飛ばし、 布団を引き剥がそうと飛びかかった刹

が

那、

「うわああ」

と悲鳴を上げて投げ飛ばされていた。

ゆっくりと布団から姿を現した天野三十郎の巨漢ぶりを見た男は震えだし、

「こ、これはご無礼いたした…」

と部屋を飛び出ていった。

「高尾太夫とやら、失礼いたした。大事はございませぬかな」

着流しの裾を直しながら三十郎が遊女に声をかけた。

高尾は三浦屋で花魁と呼ばれる最高位の遊女だっただけでなく吉原を代表する一

騒ぎに駆け

騒ぎに駆けつけた四郎兵衛と遅れて駆けてきた惣左ヱ門は三十郎の機転に畳みに 両手を突いて頭を下げた。何しろ高尾に万一のことがあっては一大事だったから

た

当の高尾は優雅に起き上がりつつ笑みを浮かべ、

「天野さまとやら、ちとお体が重かったでありんすが、 ぬし…助かりんした。 あ

りがたいことでありんす」

と頭を下げると三十郎が照れた。

「何者でございますか、あやつは」

三十郎が問うと、

海東藩江戸家老、牧田与五郎さまでございますが、酒癖も悪く普段から身分を

傘に着せて威張り散らすお人でございましてな。

身請け身請けと口ばかりで実は登楼の借金も貯まっているというありさま…。

困ったお人です」

三浦屋惣左ヱ門がほとほと困ったという顔をした。

少し思案した三十郎は、惣左ヱ門と四郎兵衛そして高尾の顔を順に眺めつつ、

「このままでは何度でも同じことが起きるに違いござらぬ。

家臣、天野三十郎に…それがしのことだが、近々身請けすることに決まった。 いかがだろうか、高尾どのは畏れ多くも上様の覚えめでたい向島の松平藤九郎

したがって今後高尾どのに手を出せば海東藩に厳しいお咎めがあろう…とかなん

とか申し渡したらよろしかろう。

あっ、いや…方便でござるよ。それがしにはその器量も度胸も金もござらぬから

ご安心なされ

二十郎が高尾に向かって笑みを送った。

二十郎が元の部屋に戻ると騒ぎを見ていたのか桜木の表情がさきほどより和ら

笑顔で酌をしてくれた。

「これは恐縮。 いささか喉が渇いたので一杯だけいただこうか」

0

三十郎が言うと四郎兵衛と三浦屋惣左ヱ門が追って来た。

たらこの三浦屋の大きな損失であるばかりか吉原の沽券にかかわります。 「天野さま。まことにまことにありがとうございました。高尾に傷でもつけられ

このとおりです」

惣左ヱ門がその場に平伏し、懐から包金を取り出し三十郎の前に差し出しなが

「こんな形でしかお礼ができませぬ。失礼ですが心ばかりのお礼、

お納めくださ

と再び頭を下げたが三十郎は、

「お心だけ頂戴いたす。これを懐に入れるとそれがし屋敷から放り出されますの

でな」

と丸い顔をさらに丸くして答え、

「ところで義歯の調整は済みましたか」

と問うた。

ともあれ、それでは御礼は別の形で考えさせていただきましょう」 「こ、これは失礼いたしました。おたみさんが下でお待ちでございます。

_

内所で三十郎は両刀を差し、 おたみと共に三浦屋の暖簾を押して外に出たとき、

「あっ」

とおたみが声を上げて躓いた。

草履の鼻緒が切れ、親指の爪でも剥がしたか出血をしていた。

「これは、粗相をしてしまいました」

おたみは玄関口に戻り、袂から手ぬぐいを取りだして手早く応急処置をし、残り の切れ端で鼻緒を繋いだ。 日々向島診療所で手伝いをしていることが役に立って

いるようだった。

「大丈夫でございますか。 駕籠をお呼びしましょうかな」

四郎兵衛が心配したがおたみは、

「大したことはございませぬ。

これで失礼いたします」

と頭を下げつつ表通りに出ると、暖簾の向こうから高尾が丁寧にお辞儀をしてい

る姿があった。

「おたみさん。義歯は旨くいったのかな」

二十郎が肩を並べて歩き出したおたみに問うた。

「はい。おかげさまで何の問題もございませんでした。

それより天野さまは大層なお手柄でございましたね」

おたみに言われて三十郎は頭を掻きながら、 「いや、その話しはここまでとしましょう」

と照れた。

大門を出て五十間道を日本堤に向かって歩き始めた二人だったが、三十郎が気が

つくとおたみは足を大きく引きずっていた。

「おたみさん。やはり辛そうじゃ。駕籠にしましょうぞ」

二十郎が言うとおたみは、

「とんでもない。使用人風情が自分の不注意で怪我をしたくらいで駕籠を使って

は御屋敷の皆様に申し訳がたちません。

御 敷に つけば診療所で処置していただけますのでこのまま歩きます」

きっぱりと言い切ったおたみだったがやは り痛 7 0 か体が揺れた。

「よしつ。 おたみさん、それならそれがし の背に掴まりなされ。

竹屋の渡しまで大した距離では無い。 負ぶってまい りましょうぞ」

三十郎はくるりと大きな背をおたみに向けて腰を落とした。

しばらく躊躇していたおたみだったが、

「うれしゅうございます。天野さま。

ではご厄介をおかけいたします」

と脱いだ草履 おたみは小作農家の生まれだったが藤九郎の屋敷に奉公し、 を叩 き、 風呂敷包みに 押し込み素直に天野 の背にその身を委 日々武家出の女たち ね た。

がある。 そういえば確 とも話をしてきたので自然に言葉付きが丁寧になっていた。 そし かに て舟で隅 日本堤に出れば隅田 田 川を渡ればそこは屋敷近くの三囲神社 \prod 方面 へと今戸橋袂まで歩けば竹屋 であ 0

渡

好奇に思えた まだ日が高 い日本堤を巨漢 のか、 振 り返って見るものもいた。 の 男が年増を背負って歩く姿は吉原通いの者たちにも

しばらく無言だった三十郎は歩く姿勢はそのままに、

「おたみさん。それがしの嫁になってくださらんか」

と呟いた。

さすがのおたみも驚き、

「な、なにを言われますか天野さま。

天野さまはれっきとしたお武家さま。あたしはご承知のような水飲み百姓出の大

年増です。

大門を潜られてどうかしちまいましたか」

おたみはそれでも三十郎の背を離れようとはしなかった。

心棒をと言ったのは…あれは嘘じゃ」 「いや、実はな。おたみさんが吉原へ出向くと聞いたで吉原を見てみたいから用

「嘘ですか…」

大きく頷いた三十郎は、

い、用心棒を口実に同道したのじゃ」 「それがしは、おたみさん。 あなたと二人きりになれる滅多に無い機会だと思

と顔を向けて照れた。

右に馬道が見え、その奥に浅草寺の屋根が確認出来るところに来ると三十郎は足

を止め、おたみを背負ったまま、

は無く、そんな出会いも機会もなかったがな、 できたとき、働き者のおたみさんに一目惚れしたんじゃ。 「常々女房が欲しいと思っておったが浪人のその日暮らし。 御館さまの御屋敷に仕えることが 女房どころの話しで

そんときはまだ名前も知らんかったがなあ…。

屋敷内だとなかなか言い出せる機会がなくてな、苦肉の策だったのじゃ」

「どうだ。こんな男では駄目かな…」

三十郎は背負ったおたみをひと揺すりしてまた歩き出した。

三十郎が自信なさそうに呟いたとき、三十郎の首筋におたみの涙が落ち、 おたみ

が三十郎の首にしがみついた。

「う、嬉 しい

こんな不出来の大年増でよかったら貰ってくださいまし」

おたみは声を上げて泣き出し、行き交う人々はまたまた好奇の目で眺めたが三十

郎は喜びで気にならなかった。

「それは嬉しい…ありがとう、おたみさん。

しかしな、 おたみさん。いま少し首に回している腕を緩めてくれんか。少々苦し

いでな」

泣き笑いの二人は嬉々として屋敷に戻ったが、 居間に藤九郎がいると聞き早速二

人揃って報告のため顔を出した。

母屋の台所から夕餉の支度をしているのであろう良い匂いが漂っていた。

「ご苦労であった。無事に済んだか…」

藤九郎はそう言いながらも二人にいつもと違う気配を感じたのか怪訝な顔をして

再び、

「どうした。なにかあったか」

と問うた。

おたみが風呂敷包みを広げ、三浦屋惣左ヱ門から受け取った義歯代金十八両を差 に受け取った五両を包みのまま返却した。 し出すと共に三十郎が三浦屋であった出来事を要約して報告しつつ、出向くとき

「ほう、それは良きことをしたな三十郎。俺も惣左ヱ門どのに鼻を高くしておら

れるは」

と破顔したが続けて、

「別の話しもあるようじゃな」

藤九郎は体を二人に向けて座り直した。

おたみさんが夫婦になる事をお許しいただきたく…」

「ははつ。いきなりの願いで恐縮でございますが、

御館さま。

どうかそれがしと

三十郎はそれだけ言ったきり藤十郎に平伏するとおたみも続いた。

「な、なんと」

瞬絶句した藤九郎だったが二人を見比べ一呼吸の後で破顔し、

「そうか。それは目出度い。

それではな、婚礼は俺たちに任せろ」

と即答した。

「ありがたき幸せ」

二十郎は大きな体を揺すりながら嗚咽を始めた。

「なんですって。おたみさんと天野さまがっ」

おたみから報告を受けたお文は飛び上がらんばかりに驚いた様子だった。

「あんたたち、いつから…」

怪訝な顔 のお文におたみは、

「吉原からの帰りにお話しをいただきまして…」

と申し訳なさそうに言うと、

「まあ、なんだよ…。

男と女なんてくっつく時はくっつくんだよ。

しかし、嬉しい話しじゃあないか、おたみさん。

あんたにも本当の春がやってきたねぇ。

母親役のあたしも嬉しいよ」

お文の明るい声が夕闇迫る向島の空に響いた。

その日の夕餉どきは三十郎とおたみの話しで持ちきりだった。

「天野どの。 お主はそれがしと屋敷で独身ただひとりの相棒だったが、 抜け駆け

されましたか

神保金之助が冗談めいて声を上げた。

じゃ。それがしもおたみさんに告白しようかどうしようか長い時間を迷っていた 「いや神保どの、そのようなつもりは毛頭無いがな、こうした話しは勢い が大切

早くも二杯目の飯を口にしながら天野三十郎は照れた。

するとお文が、

だからそのうちお姫様かなんかが天から降ってくるよ」 「でもさあ、神保さまは若いし…なによりもさ、公方様の身代わりをなされたん

とからかった。

「そうですね。御屋敷内の独り者の女はおたみさんが嫁いでしまうと私を含め皆

年寄りしかいないから、神保さまのお姫様捜しをしないといけませんね」

酒が入ったからか静香までが軽口を叩いた。

「三十郎」

藤九郎が呼びかけた。

「はつ」

「お主、婚礼に呼ぶべき親族はおらぬのか」

と問うた。

「はい、両親はすでに他界しておりますが兄が一人おりました…」

「おるのか…」

「ははっ。ただしそれがしがお役目を辞めさせられたおりのどさくさで兄は行き

方知れずとなっており、すでに四年ほど消息がわかりませぬ」

「なるほど。

ではおたみは兄弟などはおったかな」

盃を空けながら藤九郎が再び問うと、

「兄弟姉妹は五人いたことになっておりますが、口減らしのためてんでんばらば

らでございまして皆どうしておるのやら分かりません」

おたみが答えるとお文が、

「殿さまあ。百姓の子などというものは皆そんなものでございますよ」

と口を出した。

「ふうむ…。いや、他でもないが三十郎とおたみの婚礼をどのようにすべきかを

な、考えておったのじゃ」

藤九郎が呟くと、

「もったいのうございます。

我らは御館さまと皆様に見守っていただければ他に望みはございません。

形だけで結構でございますので…」

三十郎が頭を下げるとおたみもそれに倣った。

昨 年は 長四郎とお染めの婚礼を祝ったが、 三十郎とおたみの婚礼 この日取 りは

つが良いかのう」

盃を箱膳に置き藤九郎は腕を組んだ。

「藤九郎さま。まずは婚礼のお衣装をいつもどおり越後屋さんにお頼みし、 その

仕上がりに合わせて婚礼の日取りを決めましょうぞ」

と静香が言うと、

「え、越後屋ですかあ」

おたみが素っ頓狂な声を上げた。

当御屋敷では婚礼「勿論ですとも。

当御屋敷では婚礼衣装は越後屋さんにお見立ていただくのがすでに伝統になって

おりますからね。

お染めさんの時もそうだったのですよ」

静香がいうとお染めも、

「ええっ。それは…有頂天になってましたのでそこまで気が回りませんでした。

申し訳ありません」

と這いつくばった。

こともな ょ 61 では、 ە ر ۲ な 17 ただただ皆に機会があったときには区別無く公平にという御館さま か。 なにも越後屋 の衣裳だからと威張ることもない L Š け Ś か す

の命なのです」

井之上新界が破顔しながら言い切った。

「では明日にでも越後屋さんに顔を出して確認してみましょうか」

静香が切り出すと、

「願おう」

と藤九郎が即答した。

結局二人の祝言は本格的な梅雨前にとの考えで六月二日に決まった。

野三十郎を推挙してくれた相模屋清右衛門と越後屋三井高清の二人は賓客として 三十郎のたっての願 いで屋敷内の家族だけで式を挙げたいとのことだったが、

呼ぶことにした。

幸 い祝言当日は天候 も良く、 夕刻になると屋敷の門前はもとより母屋の回 りは

煌々と明かりに包まれていた。

この時代の婚礼は夜に行われるのが通例だったからだが、屋敷の大広間には家族

にちの顔がずらりと並んだ。

新 お文に手を引かれ白無垢姿で姿を現したおたみはすでに涙で顔を上げられなかっ 郎新婦 の媒酌人は無論藤九郎とお蘭だったが、 天野三十郎の建屋 から母 親役 0

「ほらおたみさん、 泣きっぱなしでは化粧が崩れてしまうよ」

お文が心配するもののおたみの涙は大広間に座してからも止まらなかった。

末席に座していた土屋長四郎の妻お染めも己の境遇に似ているおたみの姿にもら

い泣きして笑われていたが、

「だって、あたしもそうだけど後家がこんなに綺麗な花嫁衣装を着ているだけで

なくお武家と婚礼を上げられるなど世間ではそうそうありませんよ。

皆お殿さまのお陰ですね」

と天井を仰いだ。

そのとき無言で静香が立ち上がり大広間から姿を消したが藤九郎を始め数名しか

その気配は分からなかったはずだ。

当の静香は油断なく門前まで歩むと煌々と焚かれている門火の側に蹲っている者

がいるのを見つけた。

殺気は感じられなかったが用心深く近づき声をかけた。

その声に顔を上げたのは薄汚れてはいたが若い女だった。一見おこものような姿 で汚れきった着衣の背には小さな風呂敷包みを背負い、手には飴色に汚れたよう かがされ ましたか。ここは松平藤九郎の屋敷でございますが…」と。

な杖があったが、その顔を見た静香は不思議な感覚を抱い た。

きちんとした姿ならきっと美しい娘に違いないその顔の両眼は閉じられたままだ

ったからだ。

血の臭いもしたのでさすがに放ってはおけなかった。 またこれまで感じたことのない刃のような冷たさのようなものを感じていたが、

静香は驚かさないようにと気を配りながら問うた。「失礼ながら、どこかお怪我をされておりますか」

「嗚呼、ご迷惑をおかけしました。すぐに退きますので…」

と立ち上がろうとしたが足をやられているようで崩れ落ちた。

り医師もおりますので治療をいたしましょうぞ」 「ここは門前でございますからともあれ中へお入りくだされ。 奥には診療所があ

静香は肩を貸すように近づくと、

「乞食同然の身、お召し物が汚れますから…」『名り戸》り、

と遠慮しつつも静香の物言いに安心したのか頭を下げつつ半身を静香に預け

うにして立ち上がった。

門を潜るとやはり異常を感じたのか佐吉が顔を出した。

「佐吉さん。こんなときではありますが新界先生をお呼びいただけませぬか。 私

はこの方を診療室までお連れしますので」

静香の願いに無言で頷いた佐吉はふっと姿を消した。

いの最中ではあったが新界は何気ない顔で座を外して診療所にやってきた。

た佐吉が患者は女と言ったからかお輝が後ろから顔を出した。

「先生。お取り込み中申し訳ございませんが怪我をされている様子。治療をお願

と頭を下げた。

いいたします」

「なに、静香さまがおつむを下げられることではございませぬ。そこに医者を必

隠居したばかりではあるが、まだまだ役に立つだろうて…」 要としているお人がいれば何を押しても駆けつけるのが医者の役目。

新界はお輝に目配せしながら寝かされている女に近づいた。

わたしは井之上新界という蘭方医。こっちは息子の嫁のお輝。 やはり医者で

す。安心してお任せくだされ」

と声をかけた。

この場におよんでは信用するしかないと判断したのだろうか、 女は頷きながら右

足の裾と右腕の袖をたくし上げた。

「ふむ、金創のようだな。

お輝。湯を沸かし、消毒と傷口を縫う準備をな」

新界が静香に命じるとお輝は「はい」と言いつつ奥に消えた。

「先生。私もなにかお手伝いを…」

静香が言うと新界は、

「助かります。腕の傷は大したことはないようじゃが足の傷は縫った方がよいだ

ろう。患者をしっかりと抑えてくださるかな」

新界はそういいながらたすき掛けして再び女の足元に立った。

それから一時ほど経っただろうか。

傷口を縫う痛みにも耐えた女はさすがにぐったりとしていたが新界は、 「よく頑張りましたな。

呂に 後 は は入れぬ 失礼ながら着衣を替え、からだを清潔にしなければならぬが傷があるから風

お輝。 私は席を少しはずすから、体を拭きなにか綺麗な袷にでも着替えさせてく

れ。

段落したらここには眼科の医師もおる。 そうそう、これは医者としてお聞きするが、 お目が悪いご様子。 これまた傷が一

差し支えなければ診察させてくだされ」

新界はそう言いながら腰を伸ばしつつ大広間に戻っていった。

大広間では箱膳を囲み、酒盛りの最中だったが新界の目配せに藤九郎がなにげに 席を立って新界と共に玄関へと向かった。

「なに、女だと?」

私が見るところその女は盲目ながらかなりの使い手のように思いますし、 「はい。腕と足に斬られた傷がありますが命には別状ないとは思います。 杖はど ただし

新界が門火が炊かれている門前を眺めながら報告した。

うやら仕込み杖と見ました」

「ふうむ。とはいえ放り出すわけにもいかぬ。

俺 「も同じような体で門前で倒れていたところを助けられたわけだしな」

藤九郎が悪戯っぽい顔をしながら、

「診療所の一室に泊め、様子をみようかのう…」

「はい。お輝が自分が看病すると申しております」

「そうか。ただし念のため佐吉どのか静香どのにも目を離さぬよう頼んでくださ

藤九郎は両腕を後ろに組みながら踵を返した。

れ。そして明日に詳しい話しを聞くことにしようぞ」

藤九郎と新界が祝いの席に戻るとまだ静香と佐吉の姿はなかった。

「御館さま。なにかございましたか」

何らかの気配を感じたのか久世仙之助が近寄り小声で問うた。

「うむ。門前にな…盲目のおこも、それも若い女だというが金創を負って倒れて

いたそうな。

新界先生の申すにはどうやらその女はかなりの使い手ではないかと…」

「ほう。診療所に留め置きなさいましたのか」

仙之助が些か心配そうな顔で聞くと藤九郎は無言で頷い

た。

方、診療時ではお輝が甲斐甲斐しく女の世話をしていた。

「ここは安全安心な場所ですからまずは傷を治すことに専念してくださいね」

お輝が包帯を取り替えながら言うと、

「私のような者を…申し訳ございません」

女は素直に横になってはいたが杖は身から離さなかった。

その夜の祝いの縁は遅くまで続いたが、 お輝と静香そして佐吉の姿は終始なか

そして大方の者にとって心安らかではあるが気怠い朝が明けた。

としてのお文をはじめとする女衆はこれまたいつもと変わらず朝早くから働き始 しかし秋子や美保らにとっては朝餉の支度はいつもどおりだったし、 その 下働

めていた。

診療所奥の一 室では門前で倒れていた女が寝かされていたが。 側にはお輝が つき

っきりで看病していた。

やはり手足の金創を縫ったからか熱を発していたからだが、 香が交代で詰めていた。 奥の間には佐吉と静

朝 の日射 しと野鳥 の声で目が覚めたのか、 女は左腕を使って半身を起こそうとし

たが手足の痛みで敵わなかったのか小さく呻いた。

「お目覚めでしたか」

お輝が脈を取りながら声をかけると女は細い声で「はい」と答えたが辛いようだ

刹那、女の身がピクッと動き傍らの杖を握ったとき井之上新界が顔を出した。

「おはよう…。熱が出ているようじゃが、薬を処方してみようか」

新界はそう声をかけながら女の傍らに座した。

「しばらくすれば粥を持ってくるように言ってあるのでゆっくりと食べなされ。

少しは力が付くだろうからな」

そう言いながら足と腕の傷を確かめた。

「さて、傷口が塞がるまで最低半月…いや小一ヶ月はかかろう。したがってそれ

まではここで遠慮無く治療に専念するとよい。

ただし、患者の名も知らぬのでは治療がやりにくいが、できたらお教えくださら

ぬか」

新界の態度に安堵を覚えたのか女は、

し時間 数 がかかるほどです。 年己の名も忘れるような日々を過ごしてきましたので思 い出すのもしば

園と申します」

と口を開いた。

「お園さんか。

並 の屋敷は松平藤九郎さまの御屋敷…そう武家屋敷です。 したがって我らは かせください。我らは悪いようにはいたしませぬからな。 いまはなぜ傷を負ったか、なぜ門前で倒れていたかはあえて問いませぬ。 の使い手ではないということも承知しておりますが、話すお気になったらお聞 貴方が またこ

新界が優しく言うとお園は無言で頷き見えない瞼を閉じた。 元気になったら当主の藤九郎さまとお会いいただきましょうぞ」

お 創 園 は別にしても寝起きが安全な場所と知ったからか緊張 の傷が完全に治癒し、動き回れるまでには結局三ヶ月ほどか の箍が外れ、 か った。 体調 を崩 実は 金

その間、 少しずつお園は己の身に起こったことを話し出した。 てしまったからでもあった。

九月も半ばになった頃だったが、 居間に藤九郎と新界、そして静香と仙之助と共

にお園が座していた。

「ふうむ。十歳のときから放浪を続けてこられたのか」

藤九郎が驚きの声を上げた。

己も長い間道場破りなどをして命を繋いできた経験からその辛さを身にしみてい

たからでもあった。特にお園は女の身であった。

「身を守るため、顔には墨を塗りわざと汚い着物を身に着けておりましたが、そ

れでも売られそうになったりと危ないことも多々ございました。

そんなとき女だてらに幼いときから…五歳から父に習っていた剣術が役に立ちま

「ほう。父上さまから手ほどきを受けましたのか」

「はい。目が見えないからこそ身を守るすべを持っていろと言われましたが、ど

ない』と言われるくらい腕が上がり、十歳のときには回りの大人たちを脅かすよ ういうわけか自分で申すのも鳥滸がましいですが『お前は女に しておくのは

うになったそうです」

「父上の流儀はなんでございますのか」

静香が思わず問うた。

っと実践的な技を身につけろと居合いを仕込まれましてございます」 「はい。無外流と聞いておりますが私は盲目故、まともに無外流をなぞるよりも

「な、なるほど。で、仕込み杖につながるわけですな」

「はい」

しばし考えていた新界だったが、

「お園さん。お目はまったく見えないのですか」

と医者らしい問いを発した。

す。とはいえ目の見える凄腕のお方には敵うものではございませんで、このよう るかどうかは判断できますし目は見えなくとも相手の太刀筋なども検討がつきま 「ものはほとんど見えません。ただし明かりがあるかないか、すぐ近くに人がい

な仕儀とあいなりました」

とほぼ完治した腕をさすった。

藤九郎が言い切るとそれまで黙っていた仙之助が膝を前に突きだし、 「まだまだお聞きしたいことは多々あれど、少しずつお話しくだされ」

「お園さん。剣術使いの端くれとしては是非あなたの腕を知りたい。出来ること

なら道場でそれがしと立ち合ってはくださらんか」

と熱っぽく話した。

でも何でもできることであればやらせていただきます。 「私にはこれほど親身になって助けていただいたお返しが何もできませぬ。立合

ただし目の見えない者の剣、自己流でございます」

と頭を下げた。

それからさらに一ヶ月ほど経った午後に完治したお園は久世仙之助と立ち合うこ

とになった。

お園の両眼は閉じられていたが、静香らが用意した小袖を着て髷を結った姿は道

場に座す者達に美しいと思わせた。

見所には藤九郎が座していたが家臣たちはもとより、新界や静香そして佐吉の姿 もあった。

お園は道場に 入り、 神棚の方向を教わると頭を下げた後、木刀を杖代わりにして

道場を縦横に歩いた。

「ああ、立派な道場でございますね」

広さを会得するための行為だったのだろうが、 お園は納得の表情で道場中央に立

った。

方仙之助も木刀を左手に提げつつお園と二間半ほどの距離を置 いて相対した。

「一本勝負、はじめつ」

藤九郎の声で道場に緊張が走った。

刹那お園は半身になったと思うと木刀の先端をまるで杖代わりのように床に置 右手は逆手に保持し、 左手は右手に添えるかのような不思議な構えをした。

仙之助は青眼に構えつつ間合いを詰めた。

と両 瞬間音もなく床を蹴った仙之助の木刀が唸りながらも振り下ろされたが腰を曲 手から木刀が ると見え ていたお園の木刀に吸収されたかのように押さえられた刹那お園の身が半回転 者の 体が なか カランと音を立てて落ちた。 木刀の擦れ合う音と共に重なるようにしてすれ違ったとき、 った木刀が花びらが咲くように、開くように仙之 助 の足を払 お園 つ た。 す 0

「それまで!」

ま何 藤 九 郎 が起こったのかを感知できたか・・・。 の声に 両者 の動きが止まり頭を下げたが、 板壁に座していた者の何人が

「ま、まいりました」

と言い切った。

お りながらも、 園がその場に座して頭を下げると一方の仙之助はしばし呆然の体でゆっくり座

ていたはずです。 「い、いや。いまのが真剣なら…いつもの仕込み杖ならそれがしの脇腹は裂かれ

お園どの、あなたは恐ろしいまでの技をお持ちだ」

と仙之助が着衣の脇が切り裂かれているのを一同に見せた。

そのとき見所に座す藤九郎が、

られたかを知りませぬが、宜しかったらこのまま我らの屋敷に客分でも何でも… 名目は結構だがご逗留いただき、お仲間になっていただけませぬかな」 「お園さん。我らはまだまだ貴方がなにをお望みなのか、何故に放浪を続けてこ

しばし床に座したままのお園だったが、 顔を上げるとその力のない両眼からは細

「ほ、本当でございますか。

い涙を落とした。

これまで厄介者と蔑まれてきた私ですが、なにかお役に立つことがございましょ

グキ」

お園が涙声で答えると、

「いや、貴方の心眼はなまじ見えている者より確かなように思います。

是非それがしの家臣の一人として助けてはくれまいか。

稽古という枠を越え、身を守る本能というか生まれながらにして剣の才能がある 貴方の剣は既存の流派には拘らない未知の強さがあるようだし、 貴方自身は

藤九郎が武士の物言いで言うとお園はまだ信じられない様子で、

ように思う」

「なぜ門前で行き倒れていた女にこれほどにもお心をかけてくださいますのか」

と涙で濡れた顔を上げた。

いたところをそこの新界先生らに助けられたのじゃ。 「お園さん。実はな、それがしも昔のことになるが体を壊し当家の門前 で倒 れて

定住する場がない者の悲しみと辛さはまだこの身に染み込んでおる・・・。

好きで放浪するものはおらんと思うが、ここで我らと一緒に生きていこうではな

いか…」

藤九郎が重ねて言うとお園は、

「う、嬉しゅうございます。

よろしくご指導お願いいたします」

とその場に平伏した。

同時に道場には大きな歓声が沸き起こった。

異例ではあっ この五人の家臣団に女のお園が加わることになった。 たが、久世仙之助、土屋長四郎、 天野三十郎、 神保金之助、 長坂角

お園が家臣団に加わったことを喜んだ一人に静香がいた。

静香自身、 屋敷の一員となり、今は亡き公儀御庭番の弥三郎から直接女忍びの技を伝授され 一春貞の屋敷に忍び込んだところを捕らえられ、その身軽さを買われて

て現在に至っている。

他にはない特殊な技量と能力を持って奥向き全般を任されてきたがその静香もす に育てたいと思った。 適任者がいるはずもなく悶悶としていたがお園の姿と技を眼前にして己の後継者 でに七十三歳になっていた。そろそろ後継者が欲しいと考えてきたが、そうそう

「静香どの。 ことは大きな欠点とはならんか」 確かにお園 の技は尋常ではないが、 貴方の後継者として目が見えな

九 郎 に 間 わ れ 、 た 静 香

は 61 確か にご指摘 の通りと存じます。

技を持つお人は見つかるはずもございませぬ。 しかしまだ詳しい事情は聞き出せないでおりますが二十歳を少し超えた歳であの

ご一同から見れば正当な剣技ではないかも知れませぬが、 天性の剣者ではない

しょうか。

またあのお方の姿勢はすべてが己の身を守るため の形。

安堵できる屋敷内ではすぐに背筋を伸ばした姿となりましょうし、 目の見えない

分だけ我らの見えていないことを知り得る力を持っております。

家屋敷の礼儀作法などには疎いですが、なにそのようなものはお教えすればすぐ

に身につくでしょう。

もともとは武

家の娘。

十数年もの間

おこも同然の姿で放浪していたこともあ

り武

茶室の釜の前 いや、私が元 に座した静香が言うと藤九郎は 気な内に一人前 にしてみせますのでお任せ願います」

「分かりました。 願いましょう」

と答えた。

お園は母屋の一室を与えられ、家臣団の一員として藤九郎に仕えることになっ

7

が輝いていた。 屋敷の空にはお園が加わったことを祝うかのような、まるで盃のような下弦の月

寛政七年九月のことであった。

あとがき

まあ、 自分でもしつこいと思うが、なかなか時代小説の筆を置く気になれない。 動機のひとつでもあったので、どう転んでも自己満足できればそれでよいとは思 っているのだが…。 元々は己のボケ防止にでもなれば良いというのが時代小説を書こうとした

けすることになった。 診療所異聞」一巻を発表し、 とはいえ結局 「首巻き春貞」 シリーズとしては十六巻、春貞外伝としての いままた春貞外伝「松平藤九郎始末(一)」をお届 「向 .]

きた。 深刻な内容にするつもりはなく、あえていうなら江戸中期の武家屋敷…それも そういえば第一巻のあとがきにも記したが、時代考証は押さえるにしてもあ 少々特殊な設定ではあるが…を舞台にしたホームドラマが描ければ良いと考えて ま ŋ

さて本巻では新しい当主、松平藤九郎が主人公として活躍するが申し上げるまで もなく松平春貞を仮託したつもりで筆を進めている。

ただし旧来からの登場人物は皆歳をとり、やはり何らかの形で舞台から退場させ

なければならない。

ば新しいキャラクタと舞台設定を考える必要があるわけで、こちらは楽しい。 夕を死なせるのは実に難しいし悲しいものだ…。 を書かねばならなかった。やはり架空の人物とはいえ自分が創り出したキャラク 本編ではもともとは商家の娘であり春貞の養女として剣の虫となった夏穂 小説とはいえ馴染みの登場人物と別れることはなかなかに辛いものだが、 の最後 となれ

逆にこれまで無かった設定だが、女性を含む六人の家臣団を登場させたわけでこ れまでにない展開を期待できると考えている。

体も盛り上がってこない気がする。 の出身といった違いにも光を当てられるし、女性陣が元気でないとストーリー 一方、女性陣 の活躍にも期待している。何しろ人数も増えたし、武家の出と農民

というわけで、今少し続く予定である(笑)。

一〇一九年十月 東京都多摩市、自宅兼仕事部屋にて

松田純

主な参考文献・資料(敬称略

・酒井シヅ「まるわかり 江戸の医学」

・菊池ひと美「江戸衣裳図鑑

菊池ひと美「江戸の暮らし図鑑」

菊池ひと美「江戸おしゃれ図絵」

江戸人文研究会

「イラスト

・図説でよくわか

る江

戸の

用語辞

典

・江戸人文研究会「絵で見る江戸の人物辞典」

野火迅「使ってみたい」武士の日本語」

山田順子「江戸の暮らしがわかる本」

稲垣史生「江戸時代大全」

大森洋平「考証要集 秘伝!NHK時代考証資料」

人文社「切絵図・現代図で歩く 江戸東京散歩」

・松下幸子、榎木伊太郎「再現江戸時代料理」・人文社「江戸庶民の食風景 江戸の台所」

三谷一馬「江戸年中行事図聚」

- 梅原亮 江 . 戸 時 の医師 修業 学問 学統
- 歴史群像編集部 編 「時代小説用語辞典」
- 羽生和子 「江戸時代、 漢方薬の歴史」
- 石川英輔 「実見 江戸の暮らし」
- 氏家幹人 大江戸死体考 人斬り浅右衛門の時代」
- 片 桐 一 男「知の開拓者 杉田玄白」
- 八幡和郎 「歴代天皇列伝」
- 沢山美果子 「江戸の捨て子たち―その肖像」
- 沢山美果子 旧東京帝国大学史談会/三好一光「旧事諮問録 「江戸の乳と子ども―いのちをつなぐ (歴史文化ライブラリー) 」 幕末諸役人の打明け話
- 揚洲周延 「千代田之御表」
- 根崎光男 「将軍の鷹狩り」

国公立所蔵史料刊行会編

「日本医学の夜明け」

- 永井義男「図説 吉原事典_
- Wikipedia

本書の無断複写・配布は著作権法上での例外を除き禁じられています。

**フだいら とうくるう しまっ 松平藤九郎始末 (一) 小金原御鹿狩の死闘 首巻き春貞外伝 (決定版)

2019年11月3日 第一刷

2020年5月12日 第二刷 (決定版)

まつだ じゅんいち

著者:松田純一

http://www.mactechlab.jp

表紙デザイン:Junichi Matsuda